第3節　小串構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査

1．医学部基幹整備（地下オイルタンク他）工事に伴う試掘調査

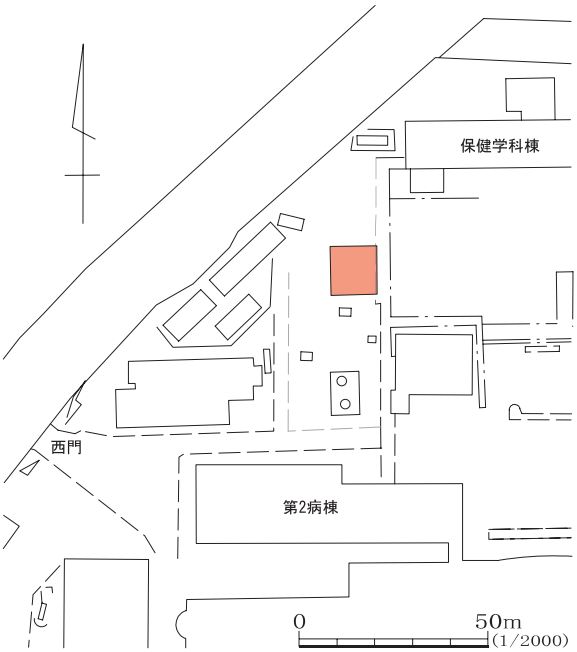


図7 調査区位置図

写真10 調査前全景（南から）

調査地区　小串構内第2病棟北側空閑地

調査面積　約144㎡

調査期間　平成16年8月17日～9月28日

調査担当　横山成己

調査結果

（1）調査の経緯（図7、写真10）

山口大学医学部（小串構内）において、基幹環境整備事業（地下タンク設置及び埋設管布設）が確定したことを受け（発掘調査を要する工事計画として、平成16年3月18日に埋蔵文化財資料館運営委員会にて承認）、開発予定地の埋蔵文化財試掘調査を実施することとなった。開発予定地周辺は、当館による発掘調査の事例が希薄な地点であるため、遺構等埋蔵文化財の存否は予測が不可能な状況であった。そのため、開発工事において最も掘削深度が深くなる地下タンク設置地点を対象に試掘調査を実施することとなった。

調査区は、1辺を12mとする正方形に設定したが、調査の安全性を考慮して壁面には現地表下約1.5m地点に幅約1mの段差を設けることとした。

（2）調査の経過

・8月11～13日　安全フェンス設置等準備工

・8月17～18日　重機による表土・造成土の掘削

・8月19日～9月21日

重機・人力による堆積土の掘削、測量、写真撮影

・9月22日～28日　現況測量、埋め戻し、現場撤去

（3）基本層序（図8、写真11・12）

調査の結果確認された基本層序は、

第1層…にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土（層厚約20～40㎝）～表土

第2層…造成土（層厚約100㎝）

第3層…褐灰色（10YR4/1）粘土（層厚約10～15㎝）～旧耕土

第4層…褐灰色（10YR5/1）粘土（層厚約40㎝）～旧床土

第5層…黄褐色（2.5YR5/3）粗砂に黄灰色（2.5YR5/1）粘土が混ざる（層厚約40～60㎝）

第6層…暗青灰色（10BG4/1）砂（層厚約30～50㎝）

第7層…暗青灰色（10BG4/1）砂に貝類が多量に混ざる（層厚20㎝以上）

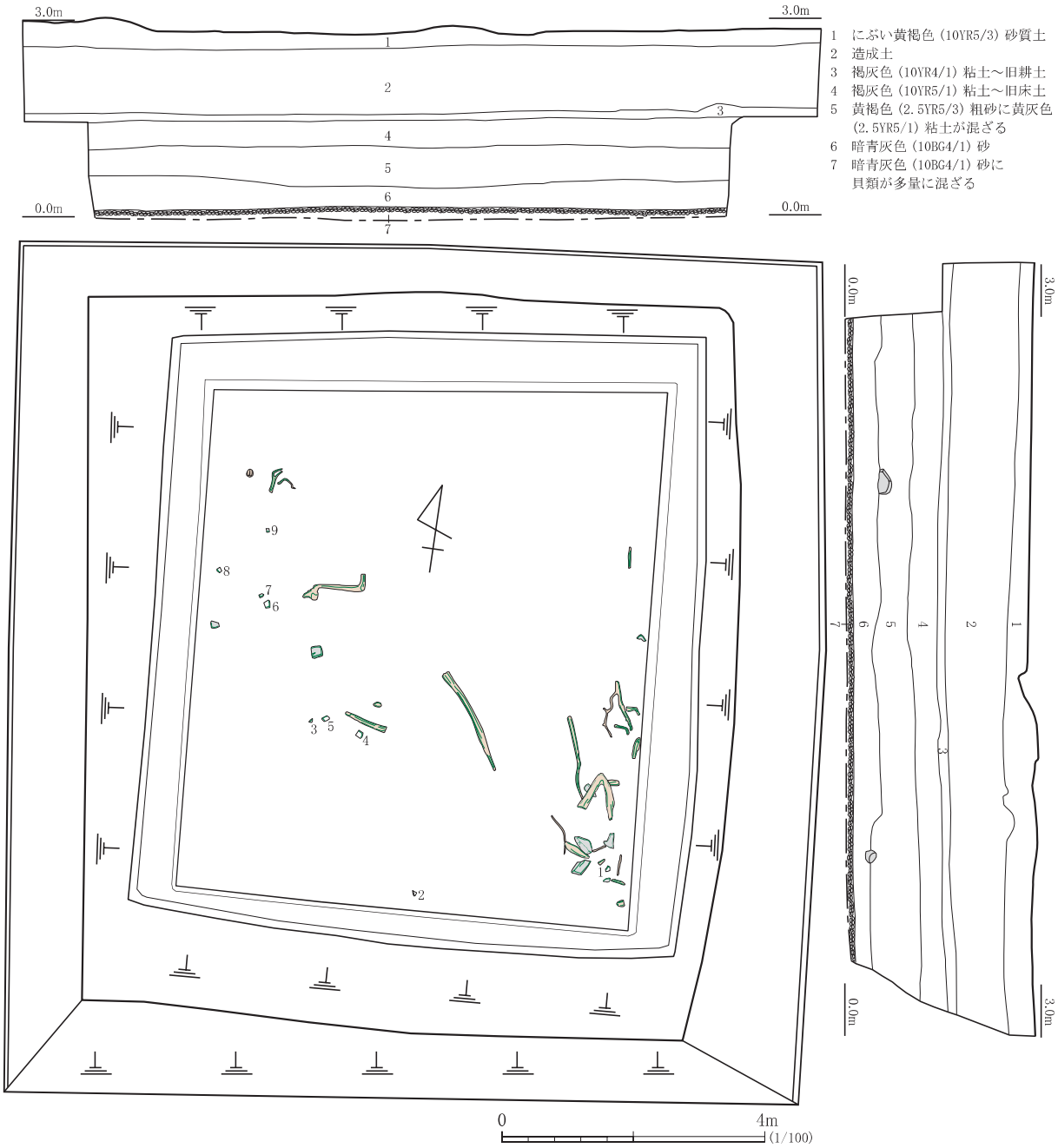


図 8 調査区平面図・断面図

写真 11 調査区北壁土層断面（南から）

写真 12 調査区東壁土層断面（西から）

となっている。

この内第3層は構内造成以前にこの地が耕作地であったことを物語っており、床土と見なされる第4層は平均して約40㎝もの厚みを有している。この第4層の土色に関しては、層上部では有機物等による土壌化が進行しており褐灰色を呈しているが、下部では青灰色を帯びている。土質的には同質であるところから同一層として認識しておく。第3～4層の層間および第4層中からは磁器、陶器、土師器、瓦質土器の小片が出土している。

第5層以下はいずれも砂を主体とする脆弱な堆積層である。第4層から第6層までは自然木・炭化木が検出されるにとどまっており、無遺物層であった。

第7層からは貝類が多量に検出された。貝の種類としては、ハマグリとアサリが大多数を占めているが、カキ、ハイガイ、ヘナタリなども存在する。このことから、過去においてこの地が汽水域の河口部或いは内湾地の陸上に近い海底部であったことが推測される。第7層上面に1平米の貝類サンプル区を設けて調査したところ、遺物収納コンテナ（40㎝×60㎝、深さ7㎝）に6箱分の貝類が採取された。この貝類に関しては、未だ整理・分類調査が完了していない。また、貝類と伴に自然木や獣骨なども出土している。人工遺物としては、層上面から縄文土器、土師器、石錘が出土している。土器類の表面はあまり風化・摩耗していないため、近隣から、小串構内の現況地形から考えると構内の北西から北方に南延している丘陵部からの流入物と推測される。

（4）出土遺物（図9、写真18・19）

上述したように、今回の調査では耕土・床土層である第3・4層と、過去における海底面と考えられる第7層上面から人工遺物が出土している。大多数が小片であるため図化が可能な資料は極少数である。

第3層～第4層出土遺物

遺物は主に層間から出土している。両層は重機による掘削を行ったため、各遺物の所属層に関しては明言しかねるのが実情であり、ここでは一括して報告しておく。

表2 出土遺物（土器）観察表

法量（ ）は復元値

遺物番号	層位	器種	部位	法量(㎝) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
1	第3～4層	磁器　皿	底部～体部	②(8.0)	素地　灰白色(2.5GY8/1) 釉　透明	精緻	畳付釉剥ぎ
2	第3～4層	磁器　碗	底部～体部		素地　灰白色(2.5GY8/1) 釉　透明	精緻	染付
3	第3～4層	陶器　碗	底部～体部	②(4.1)	素地　にぶい黄橙色(10YR7/2) 釉　灰黄色(2.5Y7/2)	精緻	藁灰釉 畳付釉剥ぎ
4	第3～4層	磁器　皿	口縁部	①(12.4)	素地　灰白色(5GY8/1) 釉　透明	精緻	染付
5	第3～4層	磁器　皿か	口縁部		素地　灰白色(2.5GY8/1) 釉　透明	精緻	輪花 染付
6	第3～4層	陶器　碗か	口縁部		素地　褐灰色(7.5YR6/1) 釉　褐色(7.5YR4/4)	精緻	鉄釉 外面刷毛目
7	第3～4層	土師器　皿	底部	②(5.5)	①②にぶい橙色(7.5YR6/4)	精緻	底部糸切り
8	第7層	土師器 甕か	体部		①灰色(N4) ②灰色(5Y5/1)	0.5～3㎜φの石英等 砂粒多く混ざる	
9	第7層	縄文土器 深鉢	底部～体部	②(10.8)	①②にぶい黄色(2.5Y6/3) ～黄灰色(2.5Y6/1)	0.5～5㎜φの粗砂粒 多く混ざる	

表3 出土遺物（石器）観察表

法量（ ）は復元値

遺物番号	層位	器種	法量(㎝)	重量(g)	石質	備考
10	第7層	石錘	全長9.8　最大幅6.4　最大厚2.0	162	片岩	

写真 13 第 7 層上面（貝堆積層）検出状況（北から）

写真 14 遺物出土状況（南西から）

写真 15 第 7 層貝除去後全景（北から）

写真 16 調査区西部遺物出土状況（西から）

写真 17 調査区南東部遺物出土状況（南から）

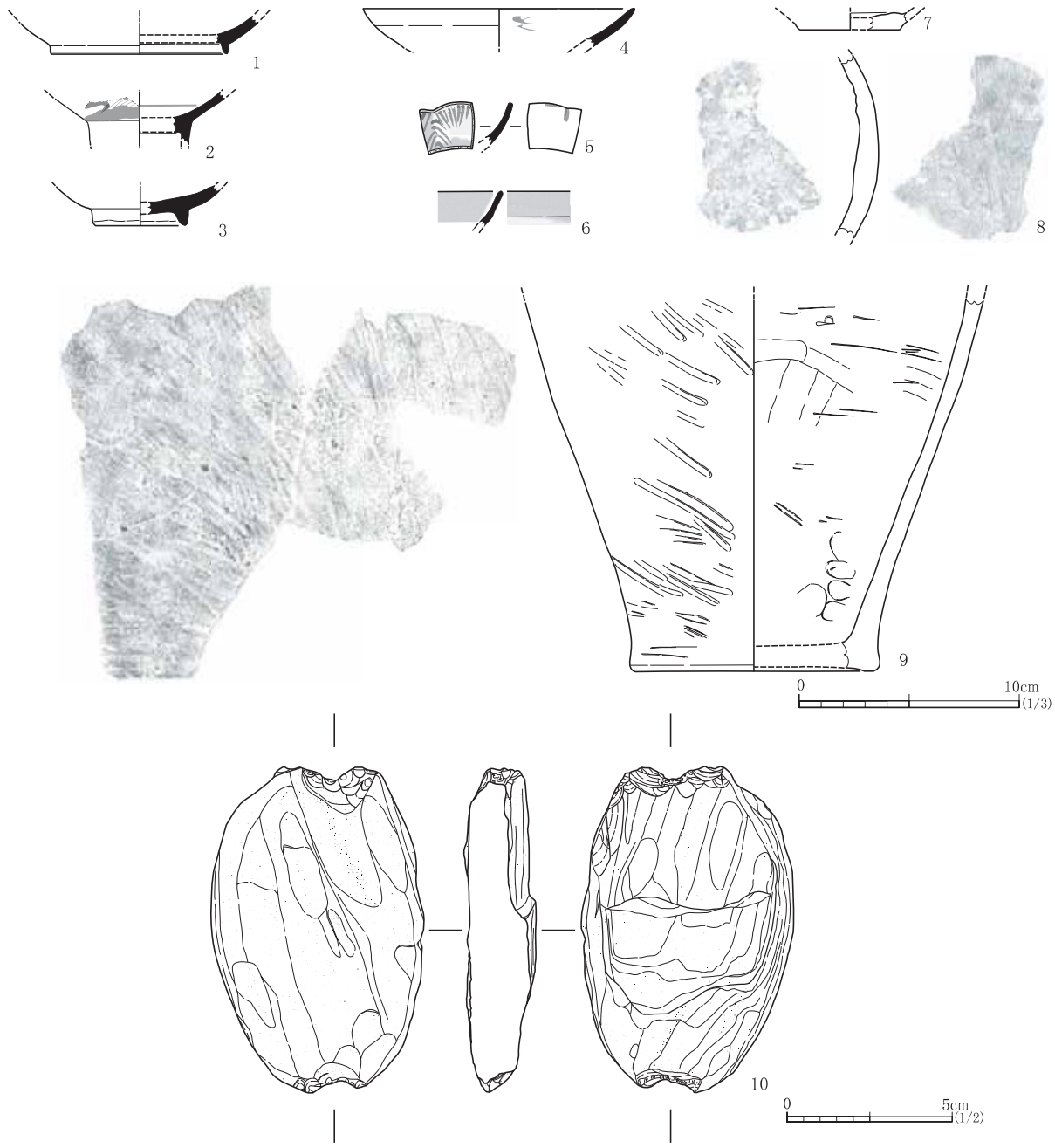


図 9 出土遺物実測図

写真 18 出土遺物

写真 19 出土遺物

1は磁器皿底部片。高台は畳付有剥ぎ。2は磁器碗底部片。高台端部を欠く。3は陶器碗底部片。高台内まで施釉されており、畳付有剥ぎ。4は磁器皿口縁部片。5は磁器輪花口縁部片である。6は陶器口縁部片。外面刷毛目。7は土師器皿底部片。底面に糸切り痕が残る。

第7層出土遺物

第7層からは縄文土器1個体、土師器1点、石錘1点が出土している。土器類に関しては調査区平面図（図8）に出土地点を示している。縄文土器に関してはやや広範囲に分布しているものの、その多くは接合する。接合しないものに関しても胎土及び調整の特徴から同一個体と見なして良いようである。

8は土師器甕体部片。外面調整はタテハケ、内面調整はナデである。外面には煤が付着している。9は縄文土器深鉢。底部は周縁の一部しか残存しないが、端部をやや外方に突出させており、底面は僅かに上げ底状を呈するものと思われる。底部から体部にかけてはやや外反しつつ緩やかに立ち上がる。外面調整は右下から左上方向の二枚貝条痕の後、部分的にナデ消しており、一部ミガキ状に処理されている。内面調整はナデ。このように二枚貝条痕をナデ消す特徴は岩田四類cの新相に見られる特徴であるが、底部から体部形態の特徴は月崎上層Ⅰ出土例に類似する。従ってここでは当資料の所属時期を縄文時代後期から晩期中頃までと見なしておく。10は石錘。平面形態ラグビーボール状の扁平な石材を利用しており、両頂部を敲き込んで凹部を形成している。凹部周辺には使用による摩耗が見られる。

（5）小結

今回の調査では遺構の検出には至らなかったが、確認された堆積層からは調査地周辺の古環境を復元する上で興味深い成果を得ることができた。

まず、今回の調査で確認した限りの最下層である第7層は、貝類の堆積状況からこの地が汽水域の水底であったことを示している。層中に石錘が埋存していた事実もこの状況を雄弁に物語っている。また、出土した土器資料から、少なくとも古墳時代まではこの地が水底であった事実が提示できる。

第7層以降の堆積状況を見ると、第6～5層は脆弱な砂層となっており、とても人類が陸上生活を行える地盤状態ではない。この層中からは自然木や炭化木以外の人工遺物が出土しておらず、また貝類などの水生生物遺体も検出されていない。

一転して第4層は非常に硬質の粘土層となっており、その上部には旧耕土である第3層が堆積している。この環境の劇的な変化は何に起因するものであろうか。

現在山口大学小串構内は、宇部市域を南北に流れる真締川の右岸に面して所在している。この真締川は、現在は小串構内東側からそのまま南進を続け河口へと至っているが、古くは小串構内の南端部、樋ノ口橋で流れを西に向け、助田町（現JR居能駅南側）付近を河口としていたようである。近世文書「舟木宰判本控」に所収されている未ノ二月（寛政11年(1799)2月）の「御届申上候事」には、「宇部村福富前殿領本川筋砂余分流出、川尻は遠干拓にて砂引不申、次第ニ川内高相成、洪水之筋は勿論地道ニても川筋の田地余分水損有之、年々御所務落猶百姓迷惑不大形儀ニ付、川尻を床海之所に付替被申付度、〆」と記されている。本川（真締川）が上流から運んできた土砂で河口が埋まってしまい、洪水被害が大きいので、河口を付け替えさせてほしいという内容である。また、同文書中には、河口付け替え工事の結果、「〆 弥水砂共ニ引宜ニ付、只今迄之川をは川尻留被申附候、〆」とあり、付け替え工事によって川の流れが良くなったので旧河口を封鎖して耕地にしたいと萩藩に願い出ている。[註1]

この文書から、18世紀末の本川（真締川）河口一帯の状況を窺うことができる。つまり当時の真締川が「土砂を多く流す川」であったこと、そしてその土砂により河口一帯は度々洪水に見舞われたため、「氾濫原」の様相を呈していたであろう、ということである。調査地での第6～5層の堆積状況は、18世紀以前

のこのような古環境を反映しているのではなかろうか。また、河口付け替えにより安定した水流が確保されたことによる旧河口の封鎖→氾濫原の耕地化という流れが、調査地における第４層を成立させたものと考えたい。第５層までの地盤状況は農耕を営むにはあまりにも脆弱であり、また塩害による農作物への被害も想定される。必然的に耕地化へは大規模な地盤改良が必要となったであろう。この地盤改良こそが今回の調査で確認された第4層、約40㎝もの厚みを持つ良質な粘土層なのではなかろうか。

この第4層と同一のものと推定される層は、過去の調査においても確認されている。医学部体育館新営に伴う試掘調査[註2]での第4層（青黄灰色粘土）、第5層（青灰色粘土）や医学部基幹環境整備に伴う試掘調査[註3]における保健学科棟北側Dトレンチの第11層（暗灰色粘質土）、医学部看護婦宿舎改修に伴う試掘調査[註4]での第5層（淡青灰色粘土）、医学部附属病院病棟新営に伴う試掘調査[註5]におけるBトレンチ第9層（灰色土）などである。これらの層は当館による小串構内遺跡の調査開始期から遺物包含層として認識されており、主に構内北部に存在することが指摘されている。これらの層からは、旧石器、古墳時代に遡りうる須恵器片、中世の土師器、瓦質土器、近世の陶磁器などの多様な遺物が相当数出土している。

仮に筆者の推測を妥当とすると、これらの遺物は地盤改良土＝客土中に含まれていたことになり、土採集地は少なくとも旧石器時代から中近世の遺物が散布する遺跡であった可能性が指摘できる。現状では小串構内周辺は周知の埋蔵文化財包蔵地が希薄な地域と言えるが、小串構内の北西に近接する丘陵上には小串古墳群が確認されており、また小串構内から北東に約1.5㎞の真締川左岸には、旧石器時代から中世にかけての複合遺跡であり川津寺が推測される川津遺跡が存在している。今後とも山口大学医学部構内遺跡の継続的な調査・研究が、周辺地域の歴史的環境の復元に果たす役割は大きいものと考えられる。

［註］

1）小川国治(1992)「第4編近世第3章近世村落の成立と発展」,宇部市史編集委員会（編）『宇部市史通史篇』上巻,宇部（山口）

2）河村吉行(1985)「第7章　宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』,山口

3）森田孝一(1986)「第4章　宇部（小串構内）医学部基幹環境整備に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』,山口

4）河村吉行(1987)「第5章　小串構内医学部看護婦宿舎改修に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』,山口

5）木村元浩(1989)「第4章　小串構内医学部附属病院病棟新営に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅤⅦ』,山口

2. 医学部職員宿舎他公共下水接続工事に伴う試掘調査

調査地区　小串構内体育館・職員宿舎周辺　　**調査面積**　約400㎡

調査期間　平成16年11月24日～平成18年4月25日　　**調査担当**　横山成己

調査結果

（1）調査の経緯（図10、写真20）

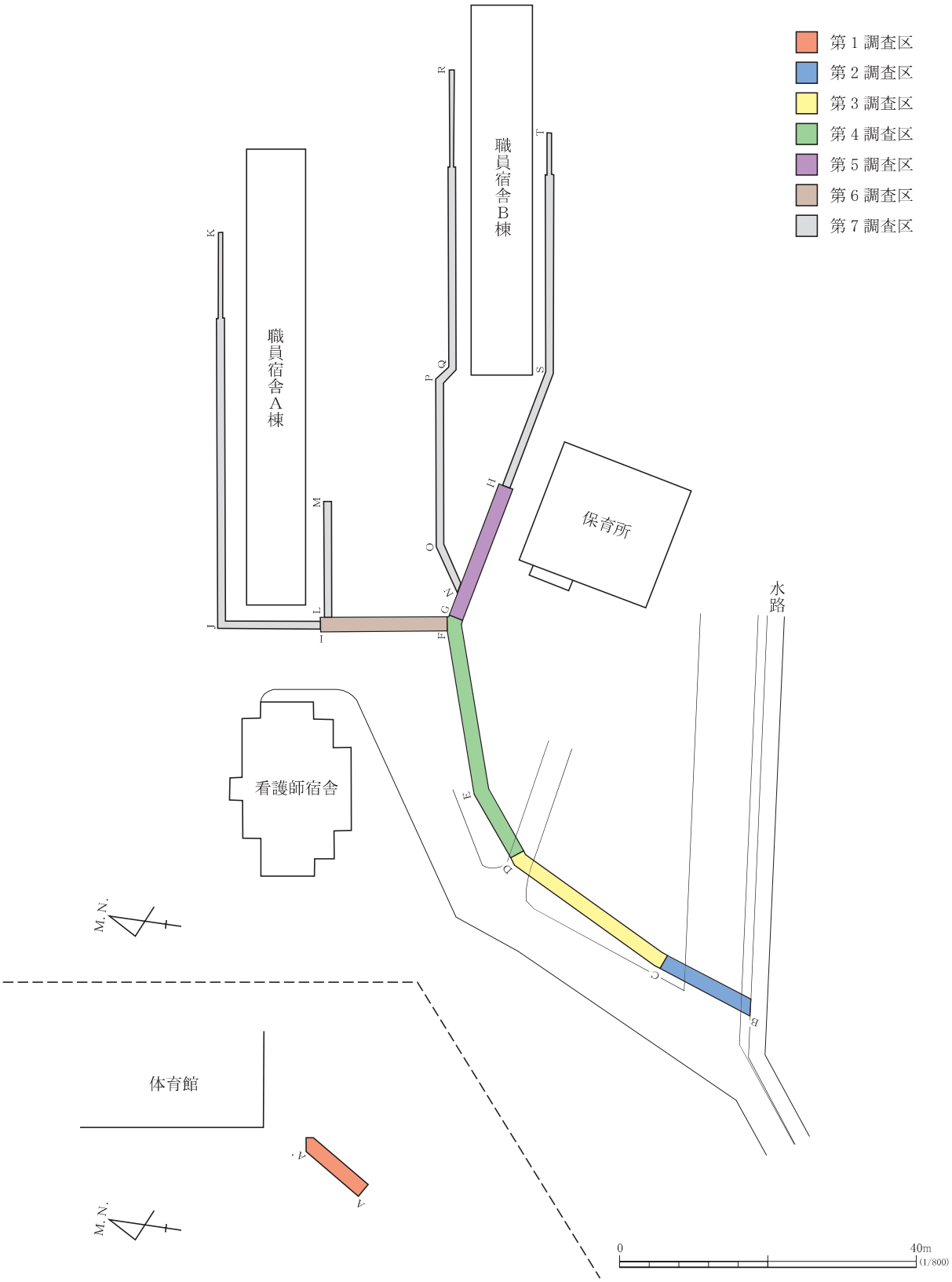
山口大学医学部（小串構内）において公共下水を本学職員宿舎等に接続させる工事が確定したことを受け（発掘調査を要する工事計画として、平成15年3月13日に埋蔵文化財資料館運営委員会にて承認）、開発予定地の埋蔵文化財試掘調査を実施することとなった。当館による開発予定地周辺での過去の調査成果から、埋蔵文化財の存在は十分に予想される地域であったが、公共下水接続という工事の性格および接続部分の地下深度（最深部で約3mの掘削を要する）から工法の変更は困難であり、地下の埋蔵文化財は記録保存以外に選択肢を得ない状況であった。

従って今回の調査では、埋蔵文化財の存在が推定される地下深度以上の工事掘削が予定されている管路のすべてを調査対象地とした。また、調査終了から工事着工までの期間を最大限に短縮するため

写真20 調査前全景（南東上空から）

写真21 発掘調査に従事した作業員

図10 調査区位置図



※調査区横の英文字は断面図（図 12ー20）に対応

図 11 調査区割図

に調査対象地を7調査区に区分し、調査が終了した区域から順次開発部局に引き渡すという方法を採用した。

（2）調査の経過

各調査区の調査期間は以下の通りである。

第1調査区…平成16年11月24日～平成16年12月7日

第2調査区…平成16年12月8日～平成17年1月5日

第3調査区…平成17年1月4日～平成17年1月31日

第4調査区…平成17年1月31日～平成17年3月4日

第5調査区…平成17年3月7日～平成17年3月17日

第6調査区…平成17年3月18日～平成17年3月29日

第7調査区…平成17年3月30日～平成17年4月25日

（3）基本層序（図19～20、写真22～29）

第1～第6調査区までは掘削深度が深いことから管路両側に工事用矢板が必要であったため、発掘調査においては矢板片側に土層観察用の畦を残しながら掘削を行った。しかしながら、季節柄降雨降雪が多く、調査途中に畦が崩落することが度々あった。そのため、調査範囲の一部に土層断面の記録が行えなかった箇所が存在する。

調査において確認した基本層序については以下の通りである。

第1層…造成土（層厚約100～150㎝）

第2層…褐灰色（10YR4/1）弱粘質土（層厚約10㎝）～旧耕土

第3-1層…にぶい黄色（2.5Y6/3）粘土（層厚約10～25㎝）～旧床土

第3-2層…青灰色（10BG5/1）粘土（層厚約10～40㎝）

第4層…粘土と砂の混合層（4-1～4-5に細分可能であり、層厚約10～35㎝）

第5層…暗青灰色（10BG5/1）砂…第1調査区　灰色（N4）砂質土に灰色（N5）粘土ブロックが少量混ざる…第4・5調査区（層厚約10～15㎝）

第6層…オリーブ黒色（10Y3/1）粘性細砂（層厚約30～100㎝以上）

第7層…灰色（10GY4/1）強粘質土に青灰色（10BG5/1）砂が少量混ざる（層厚約35～70㎝以上）

第8層…灰色（10GY4/1）細砂に同色の粘土ブロックが少量混ざる（層厚20㎝以上）

確認した各層位の性格を見ると、第2層は造成前の最終的な土地利用状況を示しており、層中に多量のタニシを含むところから見て水田耕土である。第3-1層と第3-2層は土質的に同一のものと考えられるが、同年に実施した医学部基幹整備（地下オイルタンク他）工事に伴う試掘調査[註1]で確認した第3層と同様の性格のもの、つまり第3-2層上面が床土として利用されたために土壌化したものが第3-1層と見なされる。しかしながら、調査地東部（第5調査区および第7調査区職員宿舎B棟南側）では第2層と第3-1層間にさらに旧耕土および旧床土が確認されているため、第3-1層は長期間に及ぶ水田耕作に伴う代掻き等により複数層が攪拌された状態である可能性が残る。よって今回の調査では出土遺物の所属層を厳密に分離させるため、第3-1・2に分層を行った。第4層は砂と粘土で構成された脆弱な堆積層である。各調査区で微妙に土質を変化させているが、基本的な層序としては第4層として同一視しておく。第5層は第1調査区と第4・5調査区においてのみ確認している。両地区は距離にして約100m離れており、土質も大きく異なっているが、無遺物層であったこともありここでは基本層序第5層として統一した。今後の調査においては注意が必要である。第6層以下は汽水域の貝類が混ざる水底堆積層である。医学部基幹整備

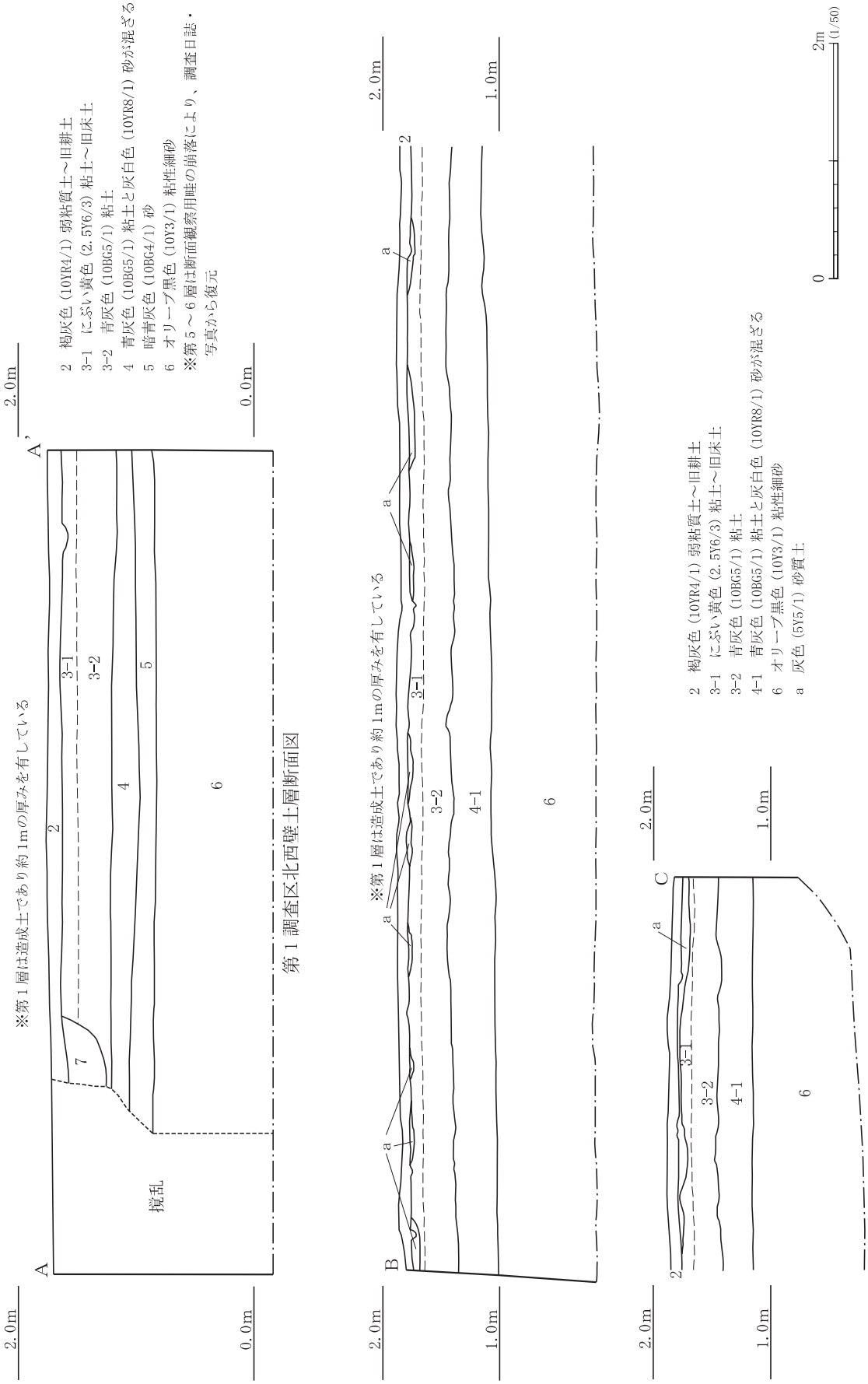
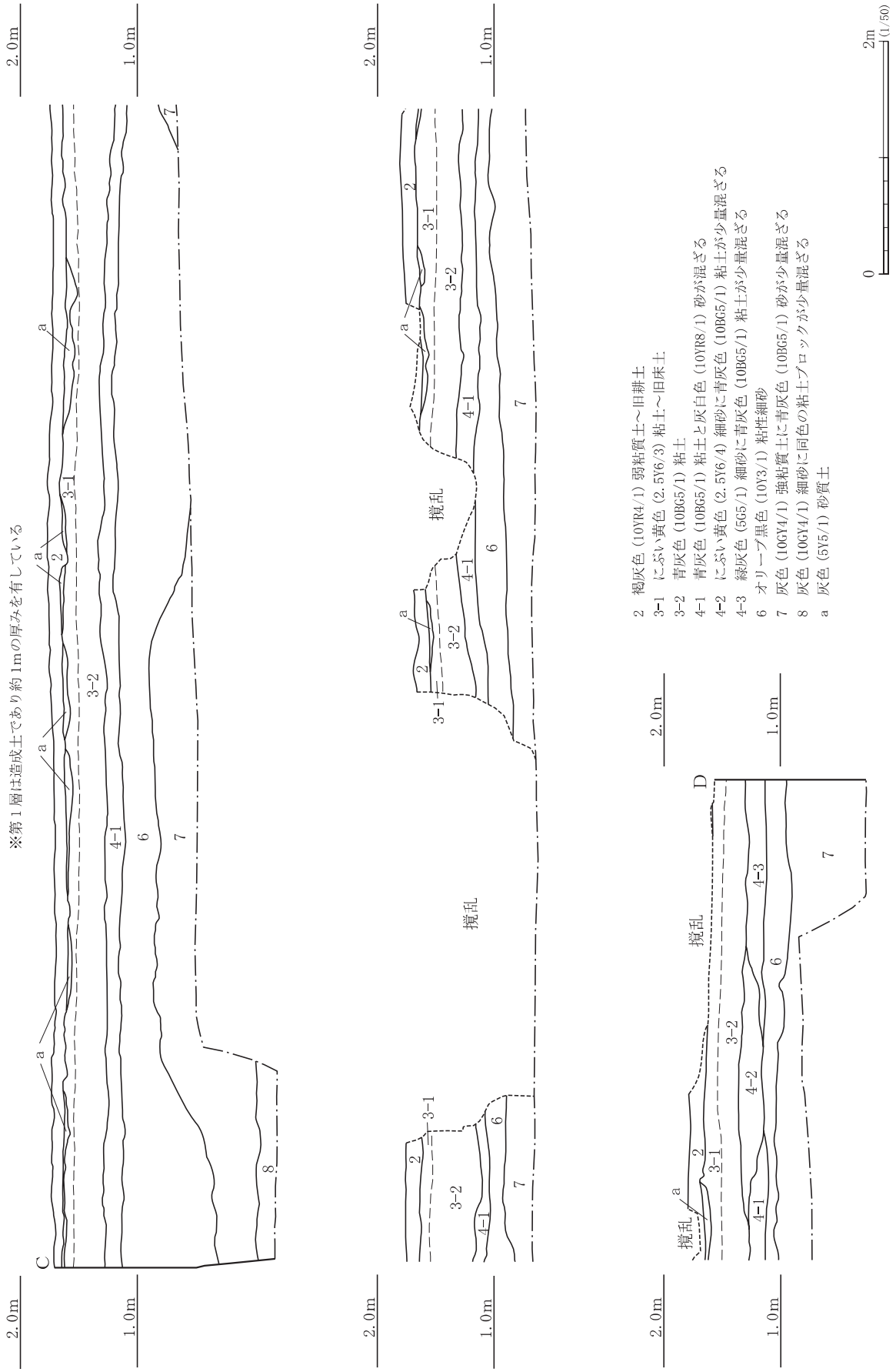


図 12 第 1・第 2 調査区土層断面図



第3調査区北西壁土層断面図

図 13 第 3 調査区土層断面図

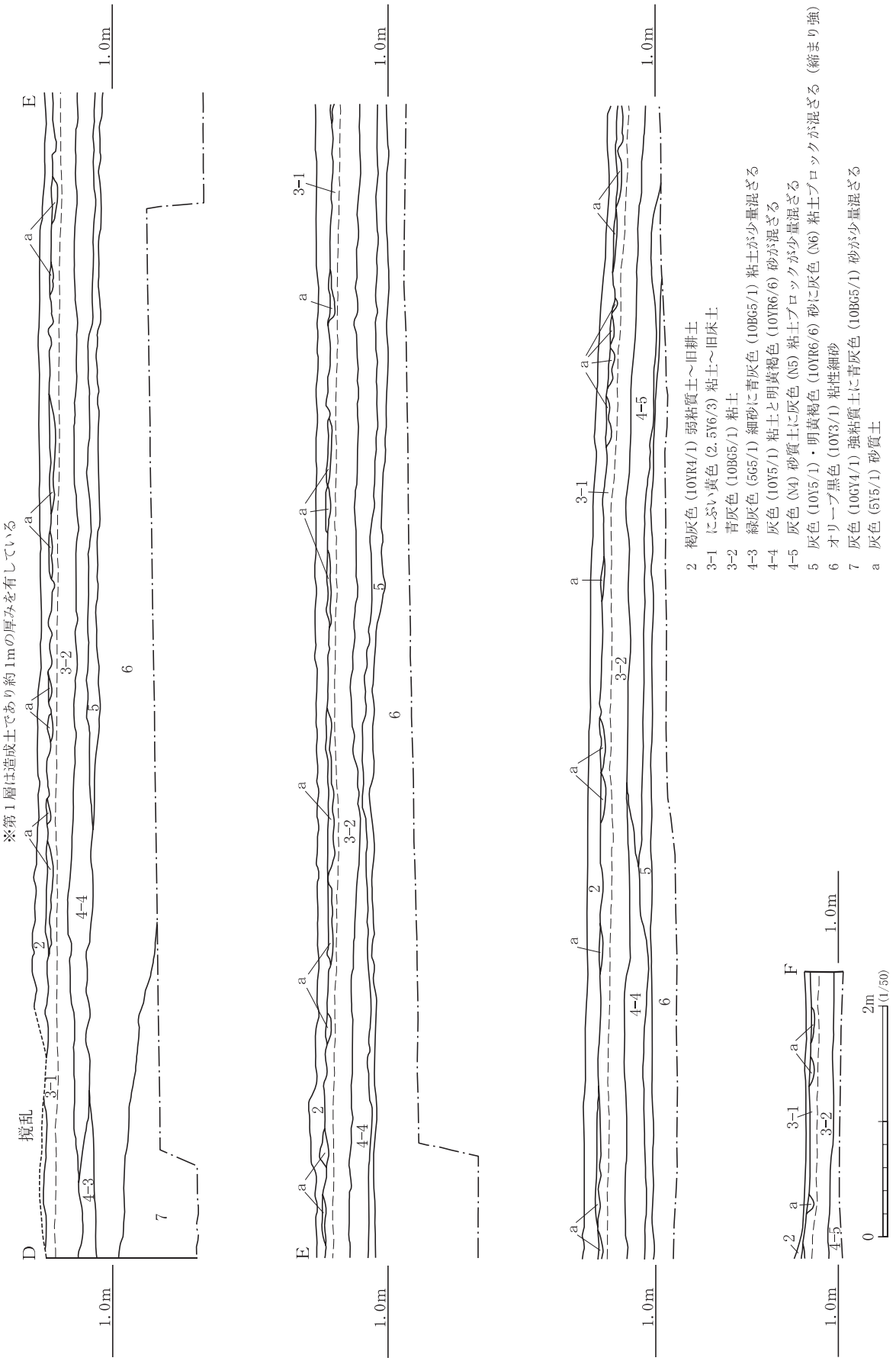


図 14 第 4 調査区土層断面図

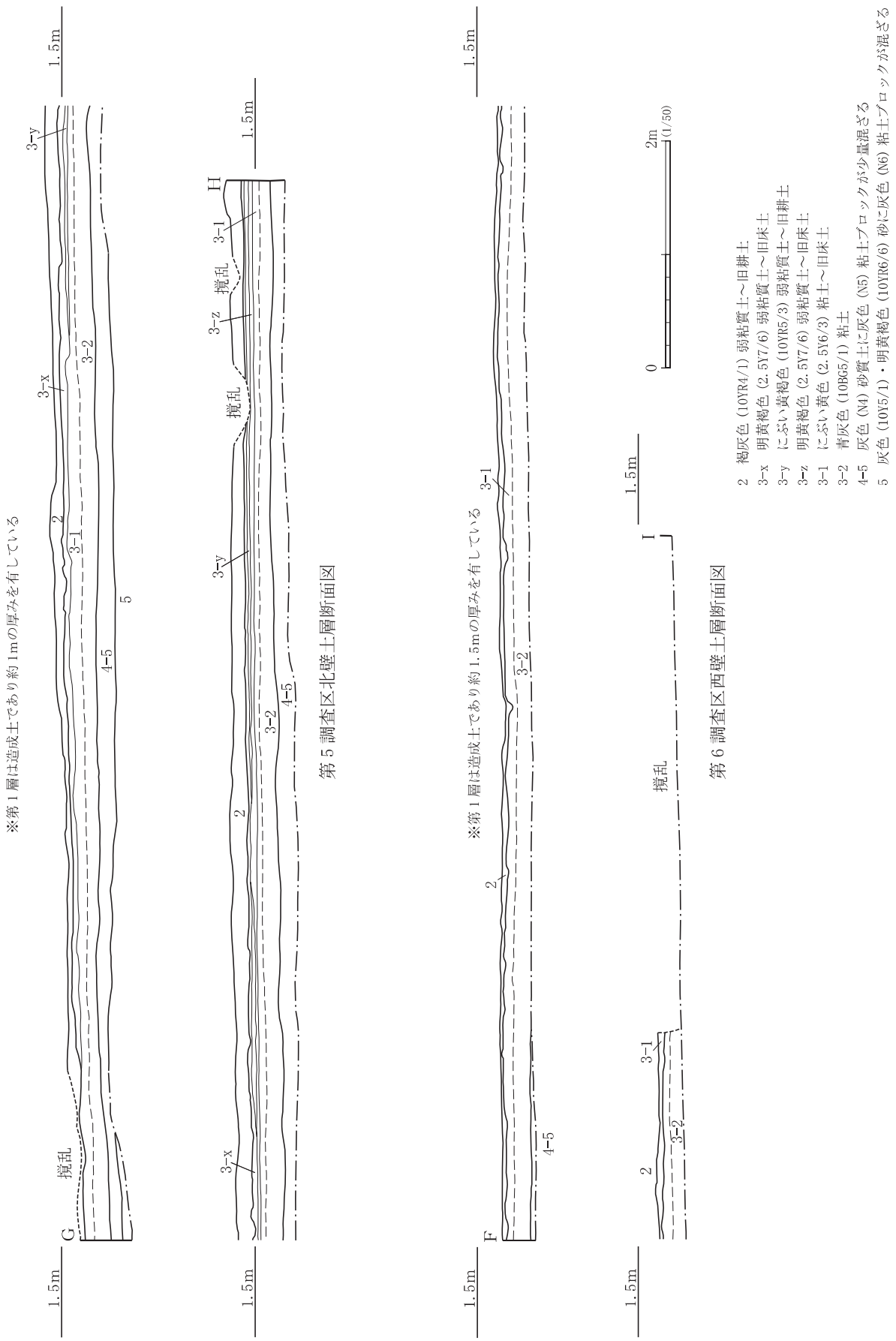
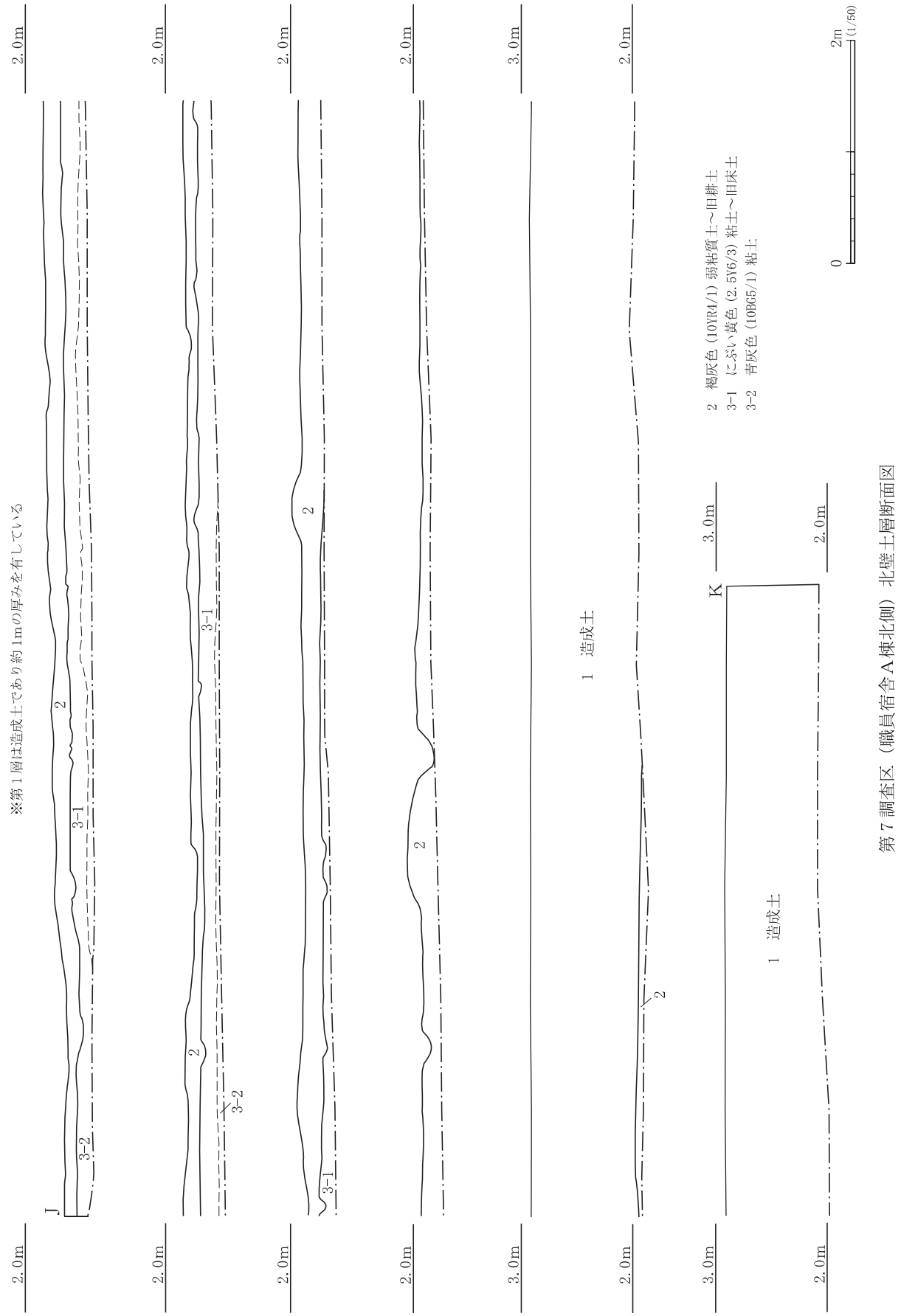


図 15 第 5・第 6 調査区土層断面図



第7調査区（職員宿舎A棟北側）北壁土層断面図

図 16 第 7 調査区土層断面図①

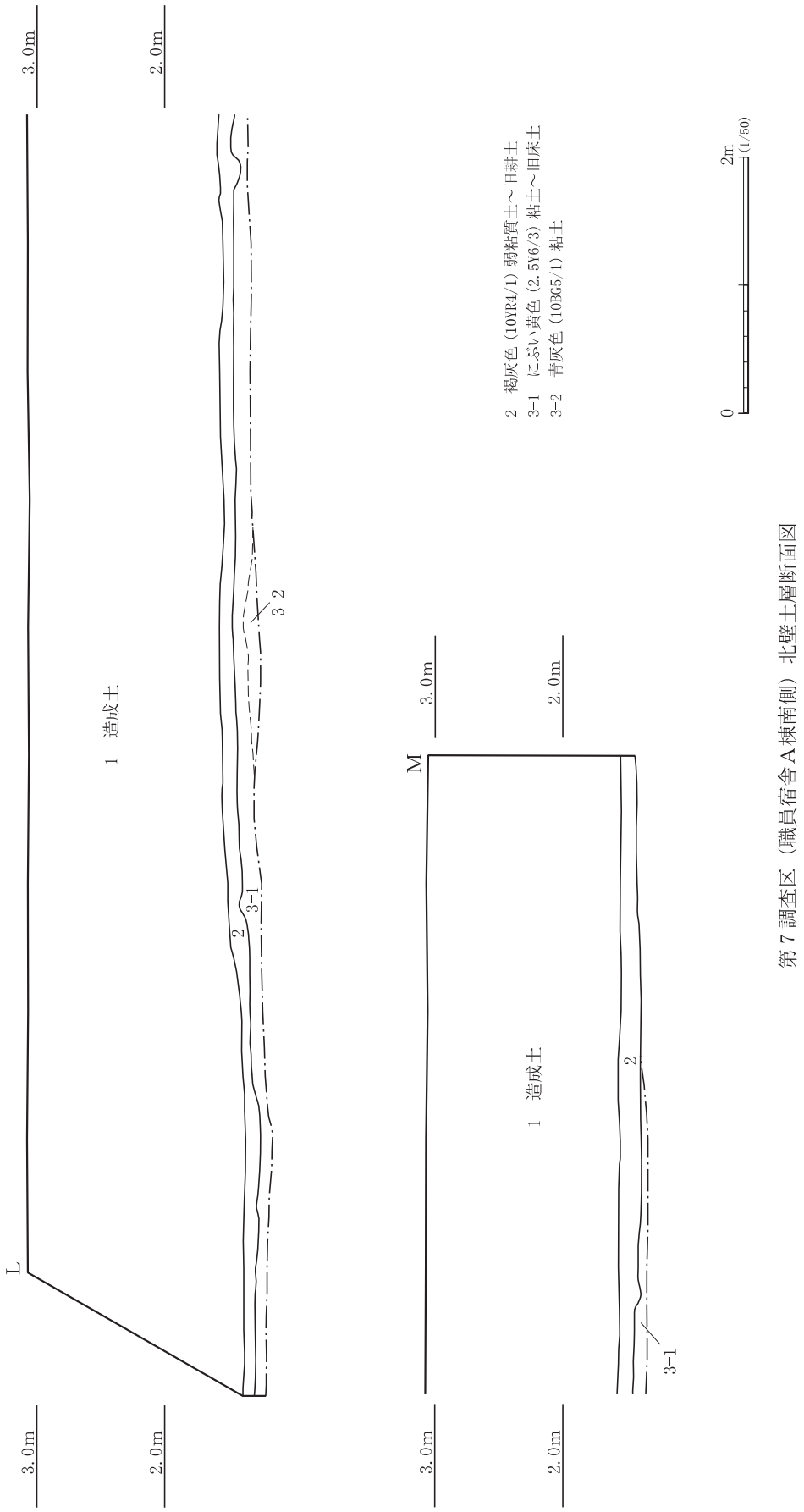
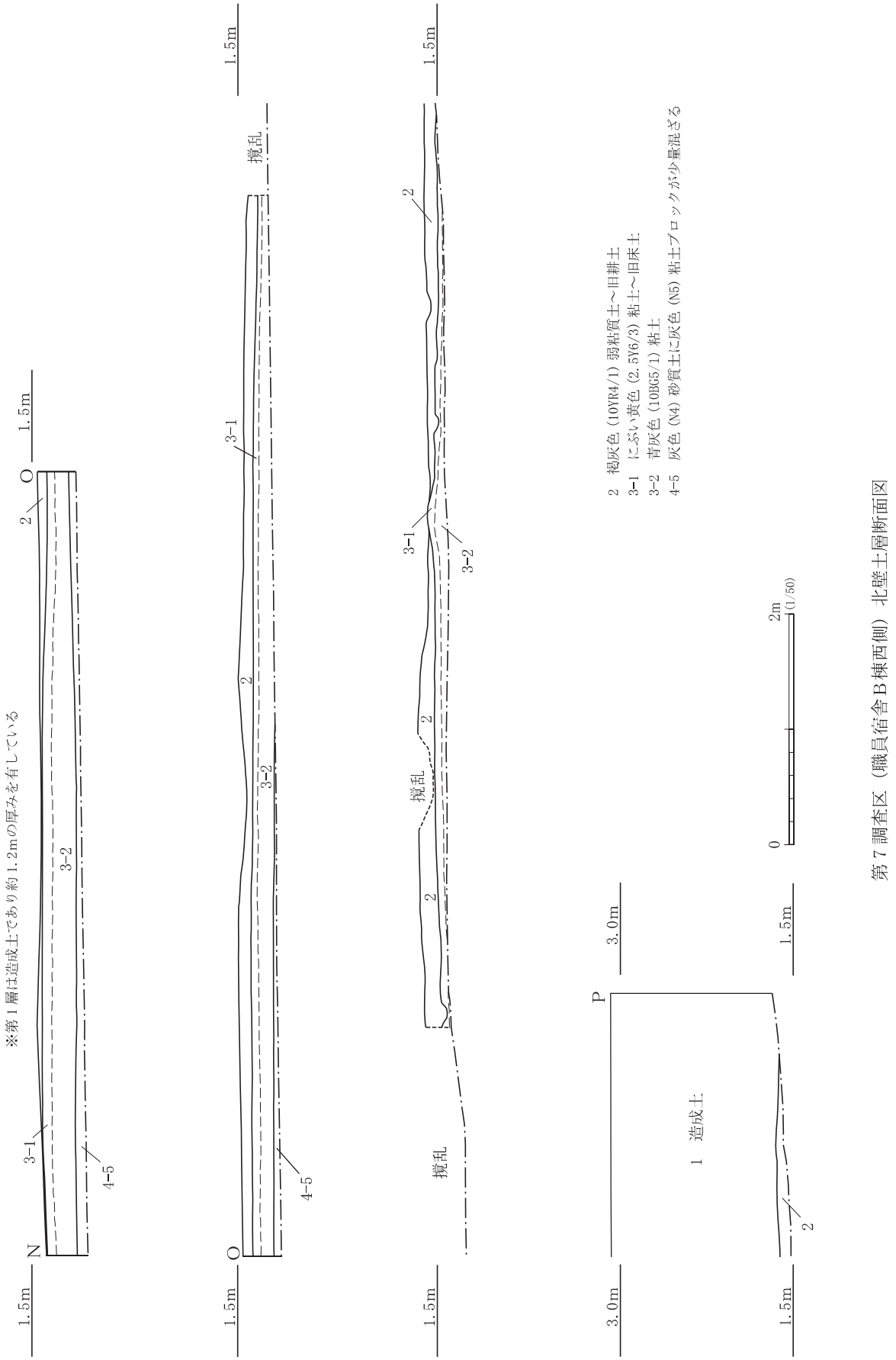


図 17 第 7 調査区土層断面図②



第７調査区（職員宿舎Ｂ棟西側）北壁土層断面図

図 18 第 7 調査区土層断面図③

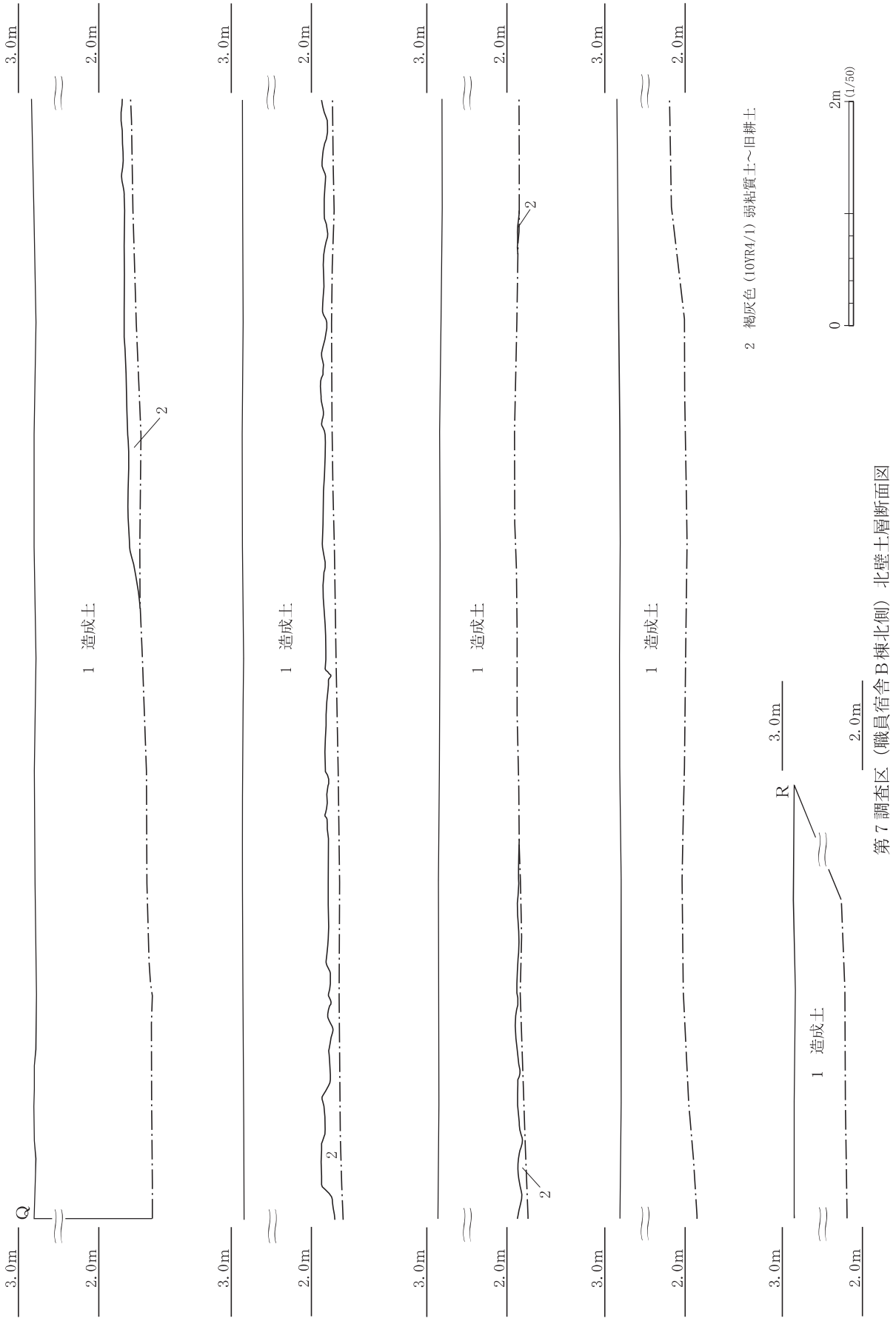


図 19 第 7 調査区土層断面図④

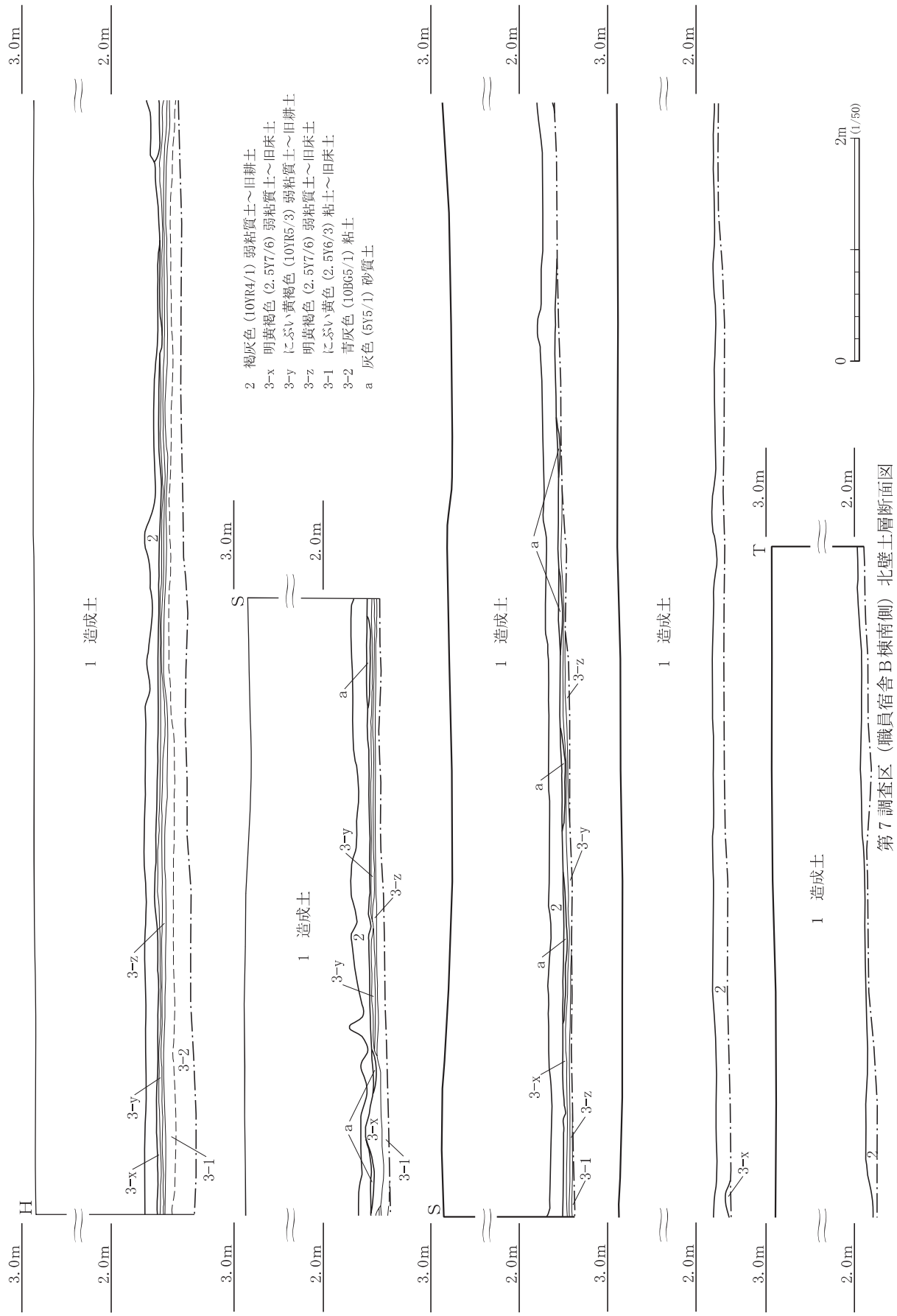


図 20 第 7 調査区土層断面図⑤

写真22 第2調査区土層断面㊤（北東から）

写真23 第2調査区土層断面㊦（北東から）

写真24 第3調査区土層断面（南から）

写真25 第4調査区土層断面（南西から）

写真26 第5調査区土層断面（南東から）

写真27 第6調査区土層断面（南東から）

写真28 第7調査区（Ａ棟北）土層断面（南西から）

写真29 第7調査区（Ｂ棟南）土層断面（南東から）

（地下オイルタンク他）工事に伴う試掘調査で確認した第7層と性格を等しくするものと考えられるが、前者では大量の貝類が検出されているのに対し、本調査地での貝類の埋存密度は希薄と言える。

（4）遺構（写真30・31）

今回の調査では、第2層下、第3-1層上面において検出された水田耕作関連の遺構しか確認されていない。調査地の過去においての地盤状況は、第3-2層形成期以前は脆弱な水底及び水流堆積であり、人類が陸上生活を行えた環境にないものと推定される。第3-2層の形成をもってはじめて調査地周辺は安定した地盤を得ることとなり、水田としての土地利用が開始したものと考えられる。

第3-2層上面で検出された遺構は、溝状遺構および耕作に伴う歩行跡、畝と推定される高まりなどである。いずれも方向は南東－北西方向である。これらの遺構については図化等記録作業を行っているが、古地図を見ると昭和13年（1938）に発行された『宇部市全図』では調査地は田地となっていることがわかる。よってこれらの遺構は土地造成前の最終的な土地利用状況を反映しているものとして、ここでは第3-1層上面の検出写真を掲載するにとどめたい。

（5）遺物（図21～25、写真32～41）

今回の調査で確認した堆積層の内、造成土および基本層序第5層、基本層序第7・8層は無遺物層であったが、他層は良好な遺物包含層であった。出土した人工遺物の総数は1972点に登り、その他に植物遺体（貝類、獣骨類、植物種子類）なども出土している。本書の作成には時間的な制約が存在するため、遺物の大多数は図化作業を終了していない状況である。ここでは各層毎に遺物をピックアップし、概略を記すことにする。

a. 第2層出土遺物

前述したように第2層は調査地造成前の最終的な耕土層であり、層中には近現代に属する遺物が存在する。1から13は陶磁器。この内3は陶胎染付の碗。5は青磁蓋。焙烙蓋か。6は輪花紅皿。7は陶器蓋。土瓶蓋か。9は陶器壺。外面に縦方向の平行タタキ痕が残る。10は陶器底部であり、外面に胎土目

写真30 第3調査区第3-1層上面検出状況（南西から）

写真31 第4調査区第3-1層上面検出状況（西から）

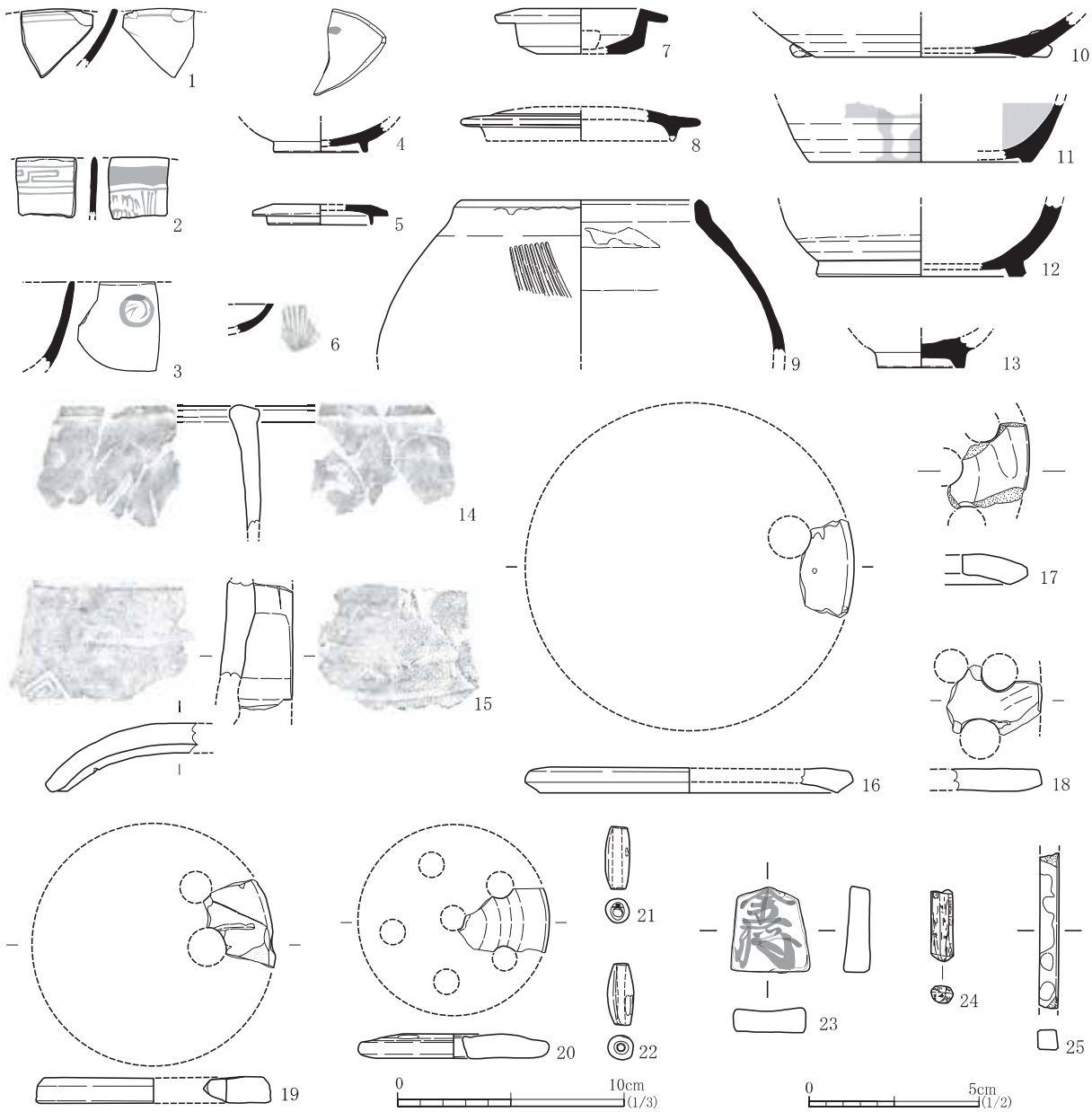


図 21 第 2 層出土遺物実測図

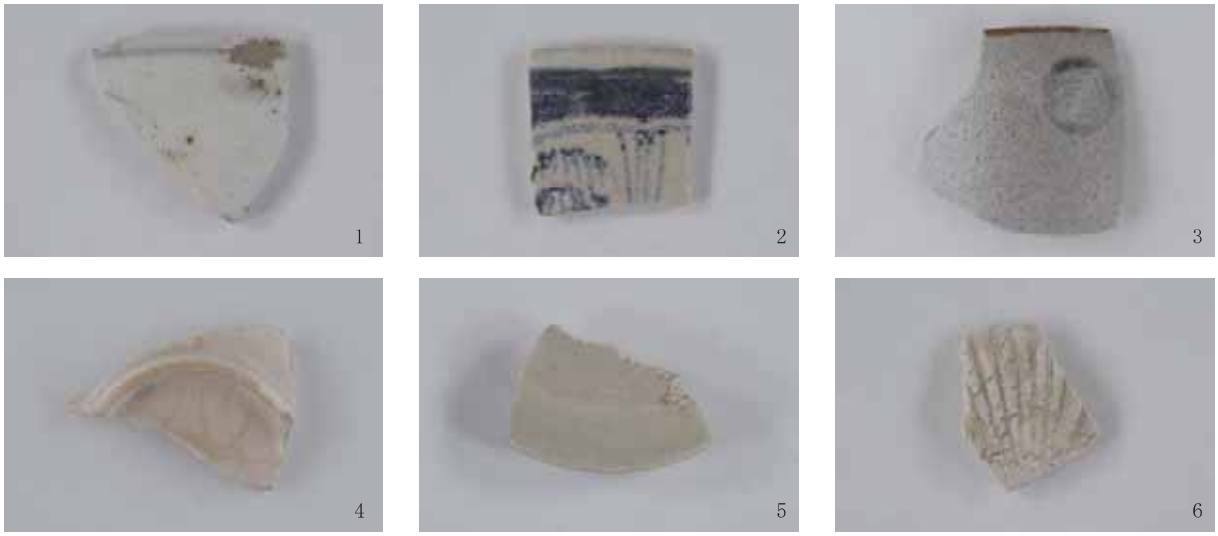


写真 32 第 2 層出土遺物

写真 33 第 2 層出土遺物

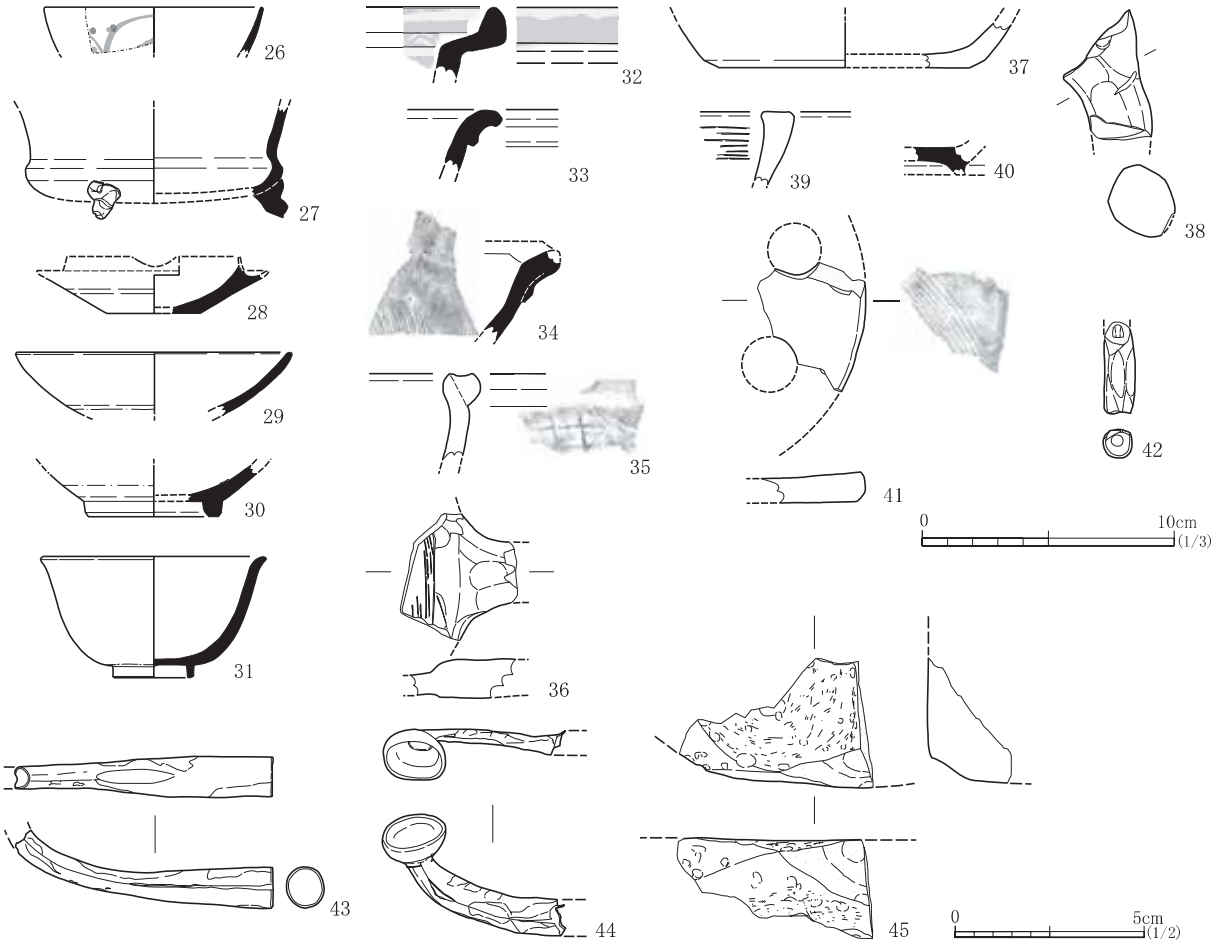


図 22 第 3-1 層出土遺物実測図

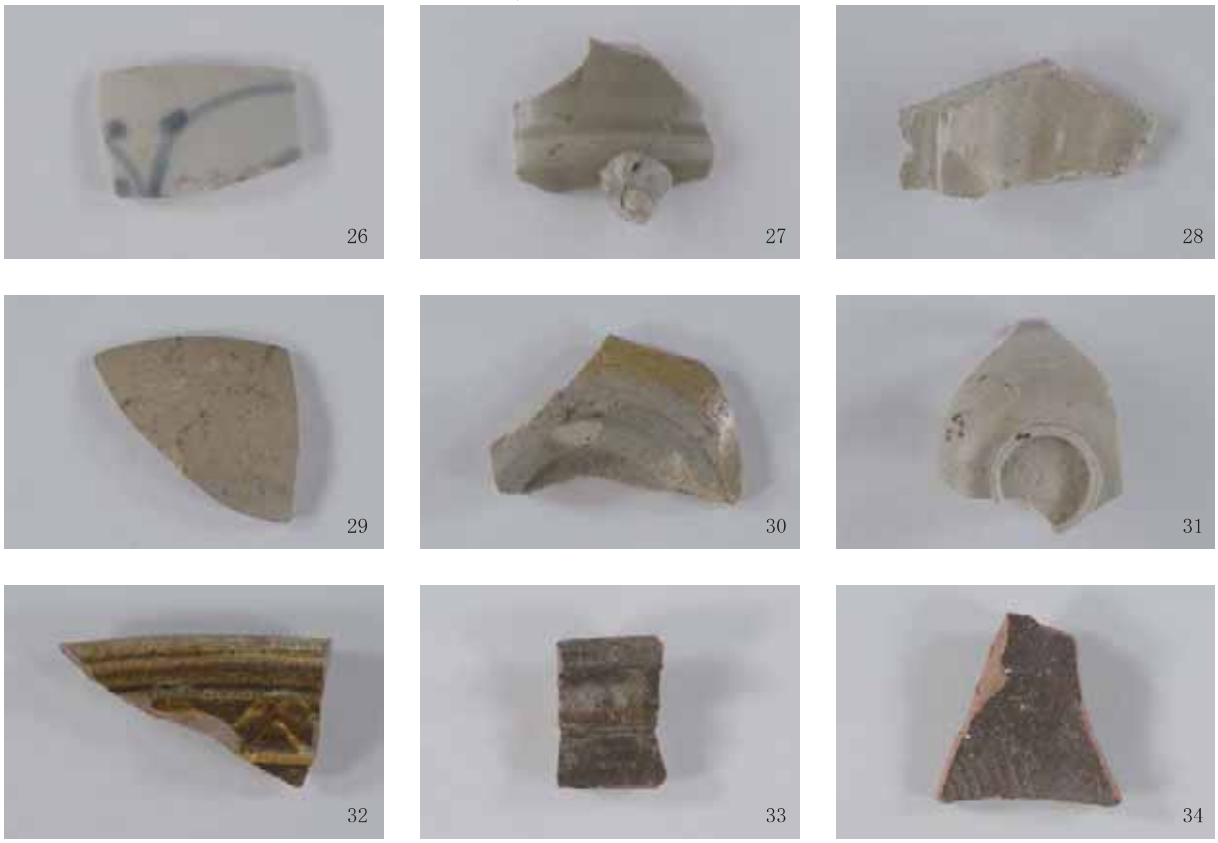


写真 34 第 3-1 層出土遺物

写真 35 第 3-1 層出土遺物

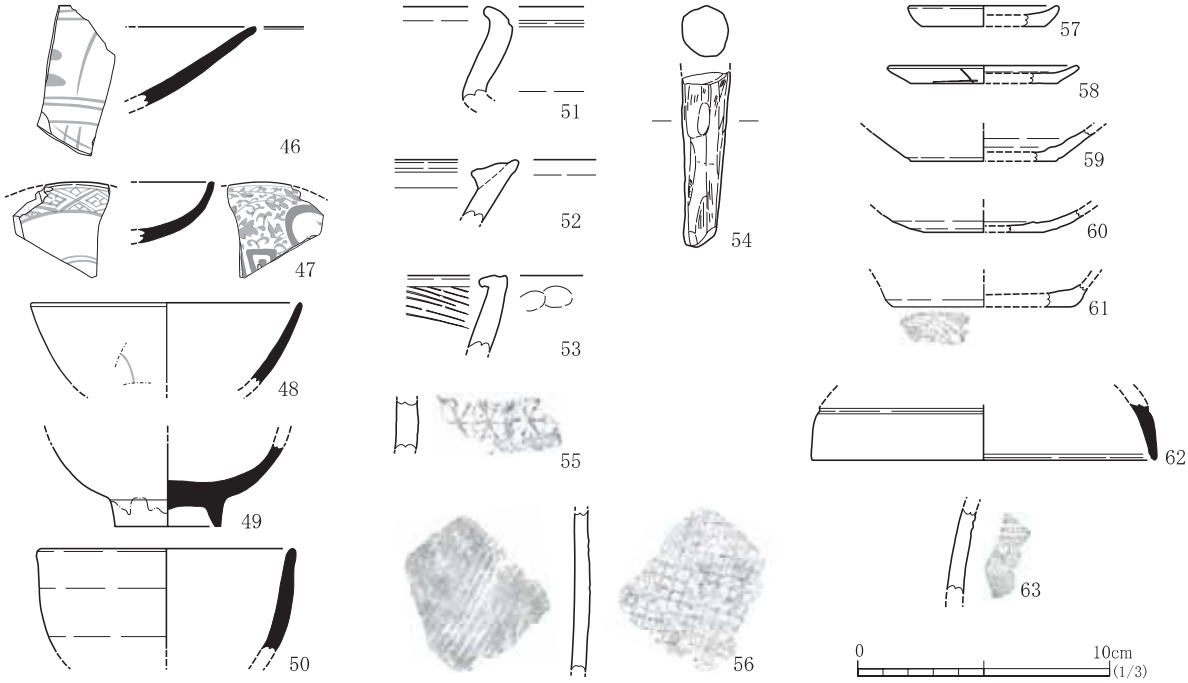


図 23 第 3-2 層出土遺物実測図

写真 36 第 3-2 層出土遺物

写真 37 第 3-2 層出土遺物

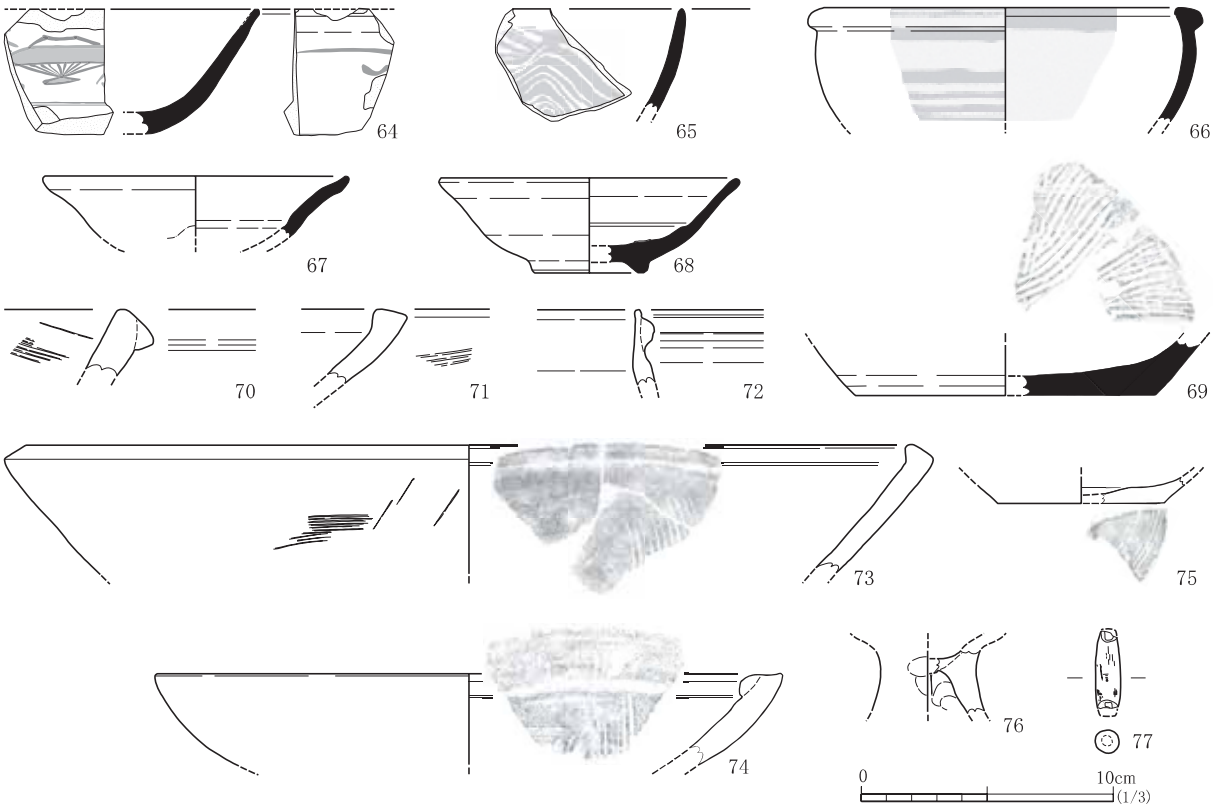


図 24 第 3-1・2 層出土遺物実測図

写真 38 第 3-1・2 層出土遺物

67-1

68-1

69-1

67-2

68-2

69-2

70-1

71-1

72-1

70-2

71-2

72-2

73-1

74-1

75-1

73-2

74-2

75-2

写真 39 第 3-1・2 層出土遺物

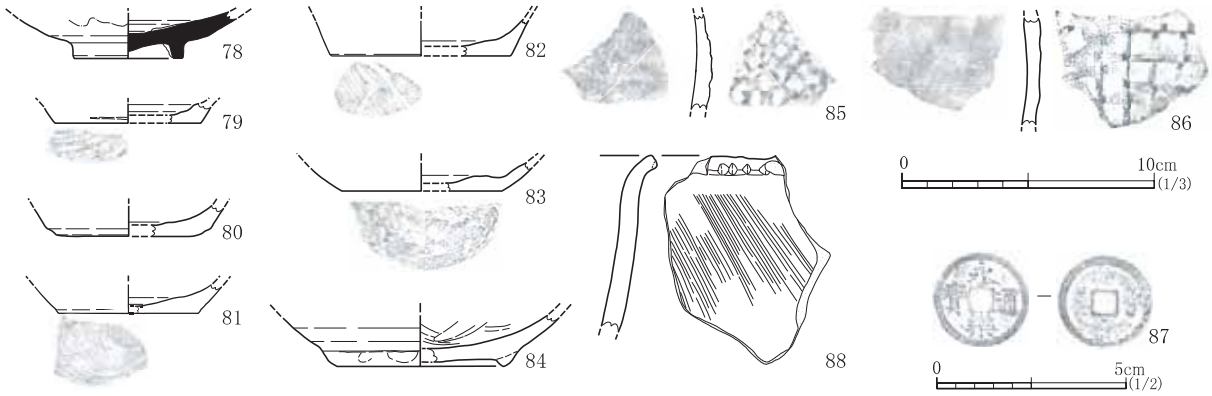


図 25 第 4 層・第 6 層出土遺物実測図

写真 40 第 4 層・第 6 層出土遺物

写真 41 第 4 層・第 6 層出土遺物

が付着する。14は土師器甕口縁部。やや内湾して収まる形態であり、端部は外面に折り返し、内面は肥厚させる。外面調整は縦ハケ後横ナデ、内面は指押さえと横ナデであるが、両面ともに板状工具の木口による圧痕が見られる。15は土師質焼成された土製品である。凸面に刻印が施され、内面には布目が観察される。焼成状況や器壁の薄さに問題は残るものの、ここでは丸瓦として報告する。16から20は土師器サナ。21・22は土錘。23は磁製の将棋駒「金」。基底部が釉剥ぎされ砂目が残ることから、絵付け、施釉後に直立させた状態で本焼されたことがわかる。24は茎形の石器。全面を緻密に研磨しており、断面形態は7～8角形状を呈している。先端部を鈍く尖らせているが、用途不明品である。25は棒状のガラス製品。断面方形であり半損している。用途不明品であるが、笄などの可能性も考えられるため掲載した。

b. 第3-1層出土遺物

ここで第3-1層として報告するものは、第3-2層上面が床土として利用されたために土壌化した部分と、第2層の下位に存在する旧耕土および旧床土から出土したものが混在する。

26から34は陶磁器。27は粗雑な脚を有する香炉。28は磁胎陶器の灯明受け皿。31は磁胎陶器の小型碗。19世紀以降の所産。31は陶器擂鉢の片口片。35から38は瓦質土器。36は把手状の破片であるが、焙烙の把手と考えられる。38は足鍋の脚部片。39は土師器甕の口縁部片。端部内面を肥厚させる。調整は外面がナデ、内面が横ハケ。40は高台を有する須恵器坏底部片。41は土師器サナ。片面にハケ調整が見られる。42は土錘。43・44は銅製煙管の雁首。45は花崗岩製の石製品であるが、小破片であるため用途不明品。平面形態が円形に復元されることから石臼片である可能性を有する。

c. 第3-2層出土遺物

第3-2層は非常に硬質な粘土層であり、当館の過去の調査で度々遺物包含層として報告されているいわゆる「青灰色粘土層」である。今回の調査においても本層からは多量の遺物が出土している。

46から50は陶磁器。49は磁器碗であるが、高台部分には釉薬が及んでおらず、焼成は素焼き状態を保っている。トキン状高台。51から56は瓦質土器。54は足鍋の脚部片。55の外面には方形区画のスタンプが連続して施されている。火鉢片か。56は体部片。外面には格子タタキが、内面にはハケ調整が施されている。57から61は土師器。57から60は皿であり、59の底部外面には糸切り痕が残る。61は体部の立ち上がりから見て坏か。底部外面に糸切り痕が残る。62は須恵器坏蓋口縁部片。古墳時代後期中頃の所産。63は弥生土器片。外面には現状で3条の沈線が残る。調整は外面が縦ハケ、内面がナデ。

d. 第3-1・2層出土遺物

各調査区において、土層観察用の畦の崩落や、矢板の土の引き込み作用によって、出土遺物の所属層を判断しかねるものが生じた。ここに掲載するのは第3-1層もしくは第3-2層に埋存していたことは確実であるが、両者の判別がつかなかったものである。

64から69は陶磁器。64は磁器碗口縁部片。見込みには2条の圏線と伴に扇が描かれる。65は陶器口縁部片。内面刷毛目。69は粗陶器擂鉢底部片。70から73は瓦質土器。73は擂鉢片。口縁端部内面を三角形状に肥厚させる。74は土師質土器の擂鉢片。口縁端部内面を蒲鉾状に肥厚させる。75は土師器皿底部片。底部外面に糸切り痕が残る。76は土師器高坏の脚柱部片。調整はナデ及び指押さえ。77は土錘である。

e. 第4層出土遺物

78は第4層上面から出土した陶器皿もしくは碗の底部片。高台と見込みに砂目が見られる。トキン状高台。79から83は土師器皿もしくは坏の底部片。79、81～83は底部外面に糸切り痕が残る。84は椀の底部片。底部は糸切りの後外周に高台を貼り付ける。高台の断面形態は鈍い三角形である。椀内面は丁寧に磨かれている。ここでは白色土器として報告する。87は1403年初鋳の明銭「永楽通宝」。

f. 第6層出土遺物

第6層は汽水行きに生息する貝類が検出される水底堆積層であり、調査地周辺の古環境の復元に重要な意味を与える。

88は弥生時代前期に属する甕の口縁部から体部片。口縁部は緩やかに外反しており、下端部に刻目を施す。風化が激しく施文具は特定できない。体部外面は左斜め上がりの縦ハケ。内面はナデか。第6層からはこの他に88と同一個体の可能性を有する体部片や、内外面にハケ調整が行われている弥生土器もしくは土師器片などが出土しているが、いずれも小片であるため掲載を略す。

（6）小結

本年度は、小串構内北部地域を対象にした発掘調査を2件（本調査と8月から9月にかけて行った医学部基幹整備（地下オイルタンク他）工事に伴う試掘調査）実施したことにより、調査地周辺の歴史的環境の復元に大きな手がかりを得ることとなった。2件の調査地で確認した基本層序は基本的に統一のとれたものとなっている。概略を記すると、造成土下が旧耕土であり、その下層に厚く堅固な粘土層が存在する。その下層は砂を中心とした脆弱な堆積層であり、人類が陸上生活を行えた環境ではない。さらに下層は汽水域の水底堆積層である。各堆積層の性格については推論を既述した[註2]のでここでは再記しない。いずれにせよ本年度の調査によって、小串構内北部地域では造成土下に人工遺物が密に埋存する堆積層が存在する事実が明白となった。今後とも埋蔵文化財の保護には十分な注意が必要である。

表4 出土遺物（土器）観察表

法量（ ）は復元値

遺物番号	地区	層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
1	4	2	磁器　碗	口縁部		素地　灰白色(10Y8/1) 釉　透明	精緻	染付
2	3	2	磁器　碗	口縁部		素地　灰白色(10Y8/1) 釉　透明	精緻	染付
3	4	2	陶器　碗	口縁部		素地　灰白色(N7) 釉　透明	精緻	陶胎染付
4	7	2	磁器　皿	底部	②(4.0)	素地　灰白色(5Y8/1) 釉　透明	精緻	染付 畳付釉剥ぎ
5	4	2	青磁　蓋	口縁部	①(4.5)③0.9	素地　灰白色(7.5Y8/1) 釉　明緑灰色(7.5GY8/1)	精緻	
6	4	2	磁器　紅皿	口縁部		素地　灰白色(5Y8/1) 釉　透明	精緻	
7	7	2	陶器　蓋	口縁部 ～体部	①(5.8)③2.0	素地　灰黄色(2.5Y7/2) 釉　オリーブ灰色 (10YR6/2)	精緻	土灰釉 土瓶蓋か
8	7	2	陶器　蓋	口縁部	①(8.2)	素地　灰色(10Y6/1) 釉　透明	0.1～0.5㎜φの 細砂粒少量混ざる	
9	4	2	陶器　壺	口縁部 ～体部	①(10.5)	素地　浅黄灰色(2.5Y7/3) 釉　灰白色(5Y7/2)	精緻	灰釉
10	7	2	陶器　甕か	底部	②(9.4)	素地　灰白色(7.5Y7/1) 釉　灰オリーブ色(5Y6/2)	精緻	胎土目
11	7	2	陶器　壺か	底部	②(9.8)	素地　灰黄色(2.5Y6/2) 釉　青黒色(5PB7/3)	精緻	鉄釉
12	4	2	陶器　碗または鉢	底部	②(9.0)	素地　淡黄色(2.5Y8/3) 釉　灰白色(N8)	精緻	藁灰釉
13	7	2	陶器　碗	底部	②(3.8)	素地　灰白色(2.5Y8/2) 釉　黒色(10YR2/1)	やや粗	鉄釉 畳付釉剥ぎ
14	3	2	土師器　甕	口縁部		①②にぶい橙色(7.5YR6/4)	0.5～1㎜φの砂粒 少量混ざる	
15	7	2	丸瓦か			①②浅黄橙色(10YR8/3)	密	刻印
16	7	2	土師器　サナ	端部	③1.1径(14.5)	①②にぶい黄橙色(10YR7/4)	0.1～0.5㎜φの細砂粒 極少量混ざる	
17	7	2	土師器　サナ	端部		①②にぶい橙色(7.5YR7/4)	0.1～5㎜φの砂粒 少量混ざる	
18	7	2	土師器　サナ	端部		①②にぶい黄橙色(10YR7/4)	0.1～0.5㎜φの細砂粒 少量混ざる	
19	7	2	土師器　サナ	端部	③1.2径(10.8)	①②にぶい橙色(7.5YR6/4)	0.1～0.5㎜φの細砂粒 少量混ざる	
20	7	2	土師器　サナ	端部	③1.1径(8.4)	①②にぶい黄橙色(10YR7/2)	0.1～0.5㎜φの細砂粒 少量混ざる	
26	2	3-1	磁器　碗	口縁部	①(8.6)	素地　灰白色(2.5GY8/1) 釉　透明	精緻	染付
27	5	3-1	磁器　香炉	底部～ 体部	②(10.2)	素地　灰色(N8) 釉　オリーブ灰色 (2.5GY6/1)	精緻	
28	3	3-1	陶器　灯明受皿	底部～ 体部	②(3.6)	素地　灰白色(2.5Y7/1) 釉　透明	精緻	磁胎
29	4	3-1	陶器　皿	口縁部	①(10.8)	素地　灰黄色(2.5Y6/2) 釉　透明	精緻	
30	3	3-1	陶器　碗	底部	②(5.2)	素地　灰色(N8) 釉　明黄褐色(2.5Y6/6)	精緻	灰釉
31	5	3-1	陶器　碗		①(9.0)②3.2③4.8	素地　灰白色(7.5Y7/2) 釉　透明	精緻	磁胎
32	2	3-1	陶器　甕か	口縁部		素地　にぶい赤褐色(5YR5/3) 釉　暗赤褐色(5YR3/3) 浅黄橙色(10YR8/3)	精緻	鉄釉 藁灰釉
33	5	3-1	陶器　鉢	口縁部		素地　にぶい赤褐色 (2.5YR5/4) 釉　暗赤灰色(2.5YR3/1)	精緻	鉄釉
34	3	3-1	陶器　擂鉢	口縁部		素地　にぶい橙色(5YR6/4) 釉　黒褐色(5YR3/1)	精緻	鉄釉
35	7	3-1	瓦質土器　鉢か	口縁部		①灰色(N4) ②浅黄色(2.5Y7/3)	0.5～5㎜φの砂粒 少量混ざる	

遺物番号	地区	層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
36	7	3-1	瓦質土器　焙烙 把手か			①②暗灰色(N3)	0.1～1mmφの砂粒 少量混ざる	
37	7	3-1	瓦質土器	底部	②(10.0)	①暗灰色(N3) ②浅黄色(2.5Y7/2)	0.1～1mmφの細砂粒 極少量混ざる	
38	7	3-1	瓦質土器　足鍋	脚部		①②灰白色(5Y8/1)	0.5～2mmφの砂粒 少量混ざる	
39	4	3-1	土師器　甕	口縁部		①②灰白色(5Y8/1)	0.1～0.5mmφの細砂粒 少量混ざる	
40	4	3-1	須恵器　坏	底部		①②青灰色(5B5/1)	密	
41	3	3-1	土師器　サナ	端部	③1.2径(14.4)	①②浅黄橙色(10YR8/3)	0.5～2mmφの砂粒 少量混ざる	
46	7	3-2	磁器　皿	口縁部		素地　灰白色(2.5Y8/2) 釉　透明	精緻	染付
47	3	3-2	磁器　皿	口縁部		素地　灰白色(10Y8/1) 釉　透明	精緻	染付
48	5	3-2	磁器　碗	口縁部 ～体部	①(10.6)	素地　灰白色(2.5GY8/1) 釉　透明	精緻	
49	6	3-2	磁器　碗	底部～ 体部	②4.2	素地　にぶい黄橙色 (10YR7/3) 釉　明緑灰色(10G7/1)	精緻	トキン状高台 高台露胎
50	5	3-2	陶器　碗	口縁部 ～体部	①(10.0)	素地　灰白色(2.5Y8/2) 釉　浅黄色(2.5Y7/3)	精緻	萩
51	3	3-2	瓦質土器　鍋	口縁部		①②灰白色(N7)	0.5～2mmφの砂粒 極少量混ざる	
52	2	3-2	瓦質土器　鉢	口縁部		①②灰白色(2.5Y7/1)	0.1～0.5mmφの細砂粒 極少量混ざる	
53	4	3-2	瓦質土器　鉢か	口縁部		①②暗灰色(5Y8/1)	0.5～2mmφの砂粒 少量混ざる	
54	3	3-2	瓦質土器　足鍋	脚部		①②灰色(N4)	0.1～0.5mmφの細砂粒 少量混ざる	
55	6	3-2	瓦質土器	体部		①暗灰色(N3) ②灰白色(5Y8/1)	0.1～1mmφの砂粒 少量混ざる	
56	3	3-2	瓦質土器	体部		①②灰白色(N8)	1～5mmφの砂粒 多く混ざる	
57	4	3-2	土師器　皿		①(5.8)②(5.0)③0.8	①②灰黄褐色(10YR5/2)	0.1～0.3mmφの細砂粒 極少量混ざる	
58	4	3-2	土師器　皿		①(7.4)②(5.8)③0.7	①②浅黄色(2.5Y8/3)	0.1～0.5mmφの細砂粒 極少量混ざる	
59	5	3-2	土師器　皿	底部	②(5.8)	①②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1～0.5mmφの細砂粒 極少量混ざる	底部 糸切りか
60	2	3-2	土師器　皿	底部	②(4.8)	①②浅黄色(2.5Y8/2)	0.1～1mmφの砂粒 少量混ざる	
61	7	3-2	土師器　坏か	底部	②(7.2)	①②にぶい黄橙色(10YR7/4)	0.1～0.3mmφの細砂粒 極少量混ざる	底部糸切り
62	5	3-2	須恵器　坏蓋	口縁部	①(13.6)	①灰色(N6)②灰白色(N5)	0.1～0.3mmφの細砂粒 極少量混ざる	
63	5	3-2	弥生土器	体部か		①②灰白色(2.5Y8/2)	0.5～2mmφの砂粒 少量混ざる	
64	6	3	磁器　碗	口縁部 ～体部		素地　灰白色(N8) 釉　透明	精緻	染付
65	2	3	陶器　碗か	口縁部		素地　にぶい橙色(7.5YR6/4) 釉　透明	精緻	刷毛目
66	1	3	陶器　鉢	口縁部 ～体部	①13.4	素地　黄灰色(2.5Y6/1) 釉　黒褐色(7.5YR2/2)	精緻	鉄釉
67	1	3	陶器　皿	口縁部 ～体部	①12.0	素地　にぶい黄橙色 (10YR7/3) 釉　灰オリーブ色(5Y6/2)	精緻	土灰釉
68	1	3	陶器　皿		①(11.8)②(4.4)③3.75	素地　灰白色(N7) 釉　灰色(10Y6/1)	精緻	砂目 畳付釉剥ぎ
69	4	3	粗陶器	底部	②(12.0)	①にぶい赤褐色(5YR5/3) ②橙色(5YR6/6)	0.1～1mmφの砂粒 少量混ざる	

遺物番号	地区	層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
70	3	3	瓦質土器　鉢	口縁部		①②黄灰色(2.5Y6/1)	0.5～2mmφの砂粒 多く混ざる	
71	3	3	瓦質土器　鉢	口縁部		①②褐灰色(10YR6/1)	0.1～1.5mmφの砂粒 少量混ざる	
72	3	3	瓦質土器	口縁部		①②灰白色(5Y8/1)	0.1～1mmφの砂粒 少量混ざる	
73	2	3	瓦質土器　擂鉢	口縁部 ～体部	①(34.6)	①②灰色(5Y5/1)	0.1～1mmφの砂粒 少量混ざる	
74	3	3	土師質土器 擂鉢	口縁部 ～体部	①(21.5)	①にぶい黄色(2.5Y6/4) ②橙色(2.5YR6/6)	0.1～1mmφの砂粒 多く混ざる	
75	3	3	土師器　皿	底部	②(6.6)	①②にぶい黄橙色(10YR7/4)	0.1～0.5mmφの細砂粒 極少量混ざる	
76	2	3	土師器　高坏	脚柱部		①②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1～2mmφの砂粒 少量混ざる	
78	4	4上	陶器　皿か	底部	②4.3	素地　灰黄褐色(10YR6/2) 釉　　明オリーブ灰色 (5GY7/1)	精緻	トキン状高台 砂目・灰釉
79	3	4	土師器　皿か	底部	②(5.8)	①②にぶい黄橙色(10YR7/3)	0.1～0.5mmφの細砂粒 やや多く混ざる	底部糸切り
80	4	4	土師器　坏か	底部	②(5.8)	①灰黄褐色(10YR6/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	0.1～0.3mmφの細砂粒 極少量混ざる	
81	4	4	土師器　皿か	底部	②(5.5)	①暗灰色(N3) ②灰黄褐色(10YR5/2)	0.1～0.5mmφの細砂粒 極少量混ざる	底部糸切り
82	4	4	土師器　坏か	底部	②(7.1)	①②にぶい黄橙色(10YR7/3)	0.1～0.3mmφの細砂粒 極少量混ざる	底部糸切り
83	4	4	土師器　皿	底部	②6.4	①②灰褐色(7.5YR5/2)	0.1～1mmφの砂粒 少量混ざる	底部糸切り
84	3	4	白色土器　椀	底部～ 体部	②6.6	①②灰白色(5Y8/1)	精緻	内面ミガキ
85	6	4	瓦質土器	体部		①灰白色(7.5YR8/2) ②灰白色(N4)	0.5～2mmφの砂粒 少量混ざる	
86	5	4	瓦質土器	体部		①にぶい橙色(5YR7/4) ②暗灰色(N3)	0.5～2mmφの砂粒 少量混ざる	
88	4	6	弥生土器　甕	口縁部 ～体部		①②灰黄色(2.5Y7/2)	0.5～1.5mmφの砂粒 多量に混ざる	

表5 出土遺物（石器・土製品・ガラス製品・金属器）観察表

法量（　）は復元値

遺物番号	地区	層位	器種	法量(cm)	重量(g)	材質	備考
21	5	2	土錘	全長2.8　最大幅1.05	3.78	粘土	色調　橙色(7.5YR6/6)
22	7	2	土錘	全長2.8　最大幅1.1	2.97	粘土	色調　橙色(7.5YR7/6)
23	4	2	磁製　将棋駒「金」	全長2.5　最大幅2.35	7.17	陶石	染付　基底部砂目
24	6	2	茎形磨製石器	残長2.1　最大幅0.63	1.24	滑石か	
25	4	2	ガラス製品　笄か	残長4.5　最大幅0.55	5	鉛ガラス	
42	7	3-1	土錘	残長3.6　最大幅1.2	4.32	粘土	色調　にぶい赤褐色(2.5YR5/4)
43	3	3-1	煙管　雁首	残長6.8	8.04	銅	
44	4	3-1	煙管　雁首	残長4.9	5.94	銅	
45	3	3-1	石臼片か	残長5.1　残高2.6	34.54	花崗岩	
77	3	3	土錘	残長3.05　最大幅1.0	2.27	粘土	色調　橙色(7.5YR6/4)
87	4	4	銅銭「永楽通宝」	直径2.5　孔辺5.5	3.6	銅	

［註］

1）本書第1章第3節の1参照

2）本書第1章第三節の1、14～15頁。

3. 医学部総合研究棟北側連絡用渡り廊下取設工事に伴う立会調査

図 26 調査区位置図

写真 42 調査区全景（南西から）

調査地区　小串構内総合研究棟北側空閑地

調査面積　37.5㎡

調査期間　平成17年3月8日

調査担当　横山成己

調査結果　医学部総合研究棟の北面に渡り廊下の新設工事が計画されたことを受け、工事掘削時に立会調査を実施することとなった。

掘削範囲は、総合研究棟北面西側に1.3m×1.3mの基礎坑8ヶ所、東側に幅1.2m、長さ10mの基礎坑2ヶ所であった。掘削深度は最深部で現況地表面から0.9mである。調査の結果、全ての掘削は造成土内に止まっており、埋蔵文化財の保護上支障がないことが確認された。

医学部総合研究棟では、新営確定後の平成14年に試掘調査が実施されており[註1]、当時の地表面から1.2～1.5mまでが造成土であり、以下が旧耕土（遺物包含層）、粘土層、砂層であることが確認されている。この内砂層からは量的には少ないものの縄文土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、磁器など多様な遺物が出土している。このように多様な遺物の存在は、これまでの継続的な調査・研究により、主に小串構内の北半部で確認されるということが明らかとなっているが、構内南東部に位置する総合研究棟周辺にも一部及んでいるという事実は重く受け止めなくてはならない。

今後とも調査地周辺での埋蔵文化財の確認および保護には十分に注意を払う必要がある。

［註］

1）村田裕一(2003)「小串総合研究棟新営に伴う試掘調査」,平成15年5月29日山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会資料